

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. VIII, 2016

仙石山仏教学論集 第8号 (平成28年)

敦煌本 『提謂波利經』 諸本の関係について

— 附「引文一覽」「『提謂波利經』本文・引文対照」

新
田
優

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について

—附「引文一覽」「提謂波利經」本文・引文対照—

新田 優

はじめに

本論文が研究対象とする『提謂波利經』は、『出三藏記集』によれば北魏の沙門曇靖により劉宋孝武年間（四五三～四六四年）に撰述された疑經（中国撰述經典）である。『出三藏記集』以降の經録においても疑經と判断され、刊本大藏經のいずれにも入藏されておらず、その經文は長らく散逸したとされていた。

『提謂波利經』のテキスト研究は塚本善隆氏が一九四一年に二一条の佚文を紹介されたのが最初であるが、その後牧田諦亮氏が一九六四年から一九七三にかけて敦煌本『提謂波利經』四本（上卷P. 3732² 下卷S. 2051・Jx. 1657・BD. 3715）を学界に紹介された。四本はいずれも断簡であり、完本は未だ発見されていないものの、『提謂波利經』經説の大部分が明らかとなった。

『提謂波利經』研究の上で最大の障害は完本の不在にある。従来の『提謂波利經』研究は、經文全体を通じて何を主張するのか、その総体が検討対象とされず、道教との関連や医学方面からの研究等、個別のテーマ・視点に関連する箇所を取り上げての検討に留まっている。こうした研究状況は、完本不在というテキスト状況と無関

係ではなからう。他方、このような個別テーマ・視点での検討は『提謂波利經』の全体像を問題とするものではなく、諸本の関係やテキスト整理を必要とするものではない。そのためテキストに関しては牧田氏の研究に無批判に依拠しており、従来その検証は行われてこなかった。

しかし、牧田氏発表当時の敦煌本公開状況は現在に比し限定的であり、氏は敦煌本四本全てを实見されたわけではない。そのため四本の関係については何ら言及されていないが、完本不在というテキスト状況において敦煌本断簡四本の相互関係とその位置付けが『提謂波利經』の総体を検討対象とする上で不可欠な基盤研究であることは言を俟たない。

本論文は敦煌本『提謂波利經』四本について、未だ牧田氏の成果にのみ依拠する『提謂波利經』テキスト研究の現状に対し、影印・カラー画像等が参照可能となった現在改めて『提謂波利經』テキストの整理を試みるものである。その過程としては、敦煌本四本に関する牧田氏の研究を取り上げて従来の認識を確認すると共にその問題を指摘し、その問題点の反省の下、現在閲覧可能である四本の影印及びカラー画像を用いて敦煌本四本対する書誌学的検討を行い、四本の関係を明らかにする。また併せて、現在までに提示されている『提謂波利經』引文の整理を行う。以上の書誌学的検討・整理の成果として、敦煌・トルファン本及び引文の対応関係を示した『提謂波利經』本文・引文対照¹⁾を附す。

一、『提謂波利經』テキスト研究の現況

『提謂波利經』のテキストに関する研究は一九四一年、塚本善隆氏が「支那の在家仏教特に庶民仏教の一經典——提謂波利經の歴史——」において佚文を紹介されたのが最初である。塚本氏は『提謂波利經』写本の存在が知られ

ていない当時、二巻にわたる経文内容を探るため、隋唐時代の諸書より二一条の引用文を検出された。その後一九六四年から一九七三年にかけて、牧田諦亮氏により敦煌本『提謂波利經』四本 (P. 3732^a, S. 2051^a, BD. 3715^a, Jx. 165^a) が紹介された。これらはいずれも写本断簡であるが、塚本氏の提示された佚文が引用文であり二次資料であるのに対し、『提謂波利經』本文であり一次資料として『提謂波利經』研究の基盤となるものである。さらに二〇〇七年、西脇常記氏によりイスタンブール大学図書館所蔵のトルファン写本中より P. 3732 と重複する内容を持つ写本 (I. U. No. 30 (verso)) が紹介された。⁴⁾

現在確認されている『提謂波利經』写本は牧田氏・西脇氏の紹介による計五本であるが、これらがいずれも断簡であり、未だ完本が存在しないという問題に対して、山口大輔氏は二〇一一年『提謂波利經』佚文補遺⁵⁾において佚文の検索を試みている。塚本氏が隋唐時代の諸書を中心に佚文を検出したのに対し、山口氏はその検索範囲を広げ、また塚本氏当時には存在しなかった CBETA・SAT 等のテキストデータベースを使用して、現存写本及び塚本氏提示の佚文中に見られない佚文三点を紹介された。

また同二〇一一年、曹凌氏は『中国仏教疑偽経綜録』において、現存写本及び既紹介の引文と重複するものも併せて三四条の『提謂波利經』引文を紹介されている。⁶⁾

【佚文紹介】

一九四一 塚本善隆 「支那の在家仏教特に庶民仏教の一經典―提謂波利經の歴史―」

【敦煌本紹介】

一九六四 牧田諦亮 「中国仏教における疑経研究序―敦煌出土疑経類をめぐって―」⁷⁾

一九六八 牧田諦亮 「敦煌本提謂經の研究(上)―安世高訳分別善惡所起經との類似―」⁸⁾

一九七一 牧田諦亮 「敦煌本提謂經の研究(下)―安世高訳分別善惡所起經との類似―」⁹⁾

一九七三 牧田諦亮 「ペリオ本「提謂經」について」¹⁰⁾

一九七六 牧田諦亮 「疑経研究」¹⁾

【トルファン本紹介】 二〇〇七 西脇常記『イスタンブール大学図書館所蔵トルファン出土漢語断片研究』

【佚文蒐集】 二〇一 山口大輔(意真)『提謂波利經』佚文補遺』

二〇一 曹凌『中国仏教疑偽経綜録』

以下に、『提謂波利經』現存五本の書誌情報を示す。なお筆者は原本を直接閲覧していないため、影印本や画像により得られる残欠や行数等以外の情報は各種目録や論者を参照した。参照した文献については情報を末尾に示す。

【P. 3732】

・所蔵施設……………フランス国立図書館

・残欠状況……………首尾欠

・首尾題……………首尾題欠

・行数……………五二四行(目録では五二二行とするが、筆者の画像による確認では五二四行)

・紙数……………二六紙

・一紙の行数……………二〇〜二二行(目録では一紙二二行とするが、インターネットサイト「International Dunhuang Project」

<http://idp.bluk/>(二〇一六年一月八日確認)公開の画像を確認したところ、全二六紙中一七紙が一紙二〇

行であった。詳細は後述する)

・一行の字数……………一七文字

・裏打ち……………破損部に紙片による補修有り

・界線……………有り

・法量……………第一紙紙幅四〇・五cm、第二紙から第二五紙四二・四二・五cm、第二六紙三三・五cm。天界

三・八cm、地界三・一cm、界幅一・七cm

・書体……………楷書体

・書写年代……………六世紀

・備考……………別筆（淡墨）による訂正あり

(*Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang, Fonds Pelliot chinois de la Bibliothèque nationale, Volume IV,*

Bibliothèque nationale, Paris, 1991, p. 230-p. 231)

【S. 2051】

・所蔵施設……………大英図書館

・残欠状況……………首欠

・写本の状態……………水濡れ有り

・装丁……………巻軸装。末尾に裏打ち有り

・首尾題……………首題欠、尾題「佛説提謂經卷下」

・行数……………三九八行（『英国国家図書館蔵敦煌遺書』では三九七行とする。尾題の前の空格を数えないためか）

・紙数……………一五紙

・一紙の行数……………二八行

・一行の字数……………一七字

・法量……………全長七二七・八cm、縦二五cm

・書体……………楷書体

・界線……………有り

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について（新田）

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

四三

- ・書写年代……六〜七世紀、隋写本
- ・備考……卷末上部に英国博物館印(朱)有り

〔英国国家図書館藏敦煌遺書〕^②、方広鎔主編、広西師範大学出版社、二〇一四年、一七〜二〇頁)

【BD. 3715】

- ・所蔵施設……中国国家図書館
- ・残欠状況……首欠。首部三行残存部分にも破損有り
- ・装丁……卷軸装。尾部に原軸(両端黒漆塗り、頂端に朱点有り)有り
- ・首尾題……首題欠、尾題「佛説提謂五戒經并威儀卷下」
- ・行数……三五九行(『国家図書館藏敦煌遺書』では三五八行とする。尾題の前の空格を数えないためか)
- ・紙数……一八紙
- ・界線……有り
- ・一紙の行数……二〇行
- ・一行の字数……一七文字
- ・法量……全長七六五cm、縦二六cm
- ・書体……隸楷書体
- ・書写年代……五〜六世紀、南北朝写本
- ・備考……二〇一〜三五七行まで、「五戒威儀」の内容を附す

〔国家図書館藏敦煌遺書〕第五一冊、中国国家図書館編、北京図書館出版社、一九九七年、一五頁)

【Jx. 1657】

- ・所蔵施設……………ロシア科学アカデミー東洋学研究所
- ・残欠状況……………写本下部全破損、上部部分破損
- ・首尾題……………首尾欠

・行数……………一三行（目録は一二行とする。写本首部、わずかに確認できる残画を一行と数えないためか）

・一行の字数……………一七字

・紙数……………一紙

・紙質……………淡褐色の薄紙

・界線……………有り

・法量……………全長二四cm、縦・二七cm。天界

三・五cm、地界三cm

・書体……………隸楷書体

・書写年代……………六〜七世紀

（『俄藏敦煌漢文写卷叙録』下冊、メンシコ

フ主編、袁席箴・陳華平訳、上海古籍出

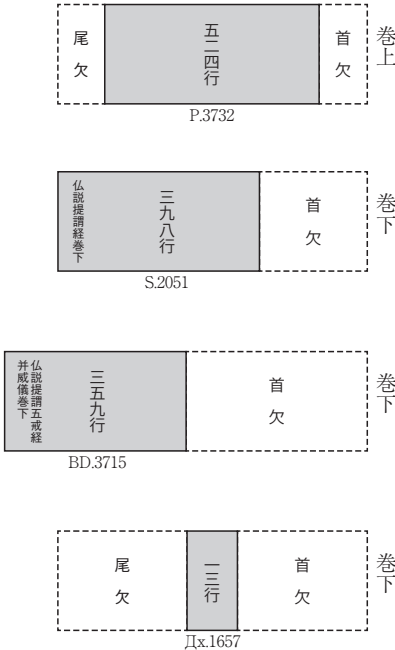
版社、一九九九年、四〇四〜四〇五頁⁽¹²⁾）

【I. U. No. 30. (verso)】

- ・所蔵施設……………イスタンブール大学図書館
- ・残欠状況……………首尾欠。経紙上部・下部の所々に破損有り

敦煌本『提謂波利経』諸本の関係について（新田）

【敦煌本諸本の現存箇所一覧】



敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について（新田）

四

・首尾題……………首尾題欠

・装丁……………卷子本

・首尾題……………首尾欠

・行数……………六二行

・紙数……………四紙

・界線……………後人の補填と推測される四一行～六二行まで（備考参照）、幅一・三cmの界線あり

・法量……………全長九二・五cm、縦二四・〇cm

・書体……………「家」「民」「師」「戒」など多くの字は隸書体をとどめる

・書写年代……………西脇氏は年代を明記しないが、前半部分（一～四〇行）に関して字体や二四・〇cmという紙幅

から古い時代の写本であり、唐代写本とされるP.3733よりも随分古いものと述べる

・備考……………I. U. No. 30 (recto) 『成具光明定意經注』の紙背に書写される。一行～四〇行（四〇行目は経紙の

継ぎ目にあたる）までと四一行～六二行までとは書写者が異なり、後部は破損あるいは遺失部

分を後人が補ったものと推測する。また転倒符号（レ）や削除符号（、）があることから

校勘を経たものであることがわかる。

（『イスタンブール大学図書館所蔵トルファン出土漢語断片研究』西脇常記、同志社

大学文学部 文化史学科 西脇研究室 編集発行、二〇〇七年、六一～七二頁）

二、牧田氏による敦煌本紹介とその問題点

まずは敦煌本四本を紹介する牧田氏の諸論著を概観し、それらの内容を整理することで、敦煌本『提謂波利経』に対する従来の認識を確認する。

一九六四年「中国仏教における疑経研究序説―敦煌出土疑経類をめぐって―」

【S. 2051】

・『提謂波利経』（首欠）の存在に言及する。その情報として、全長二四フィート（約七三・五cm）、巻首を欠く、七世紀初頭の写本であると述べる。

一九六八年「敦煌本提謂経の研究（上）―安世高譯分別善惡所起経との類似―」

【S. 2051】

・京都大学人文科学研究所に齎されたスタイン文書の引き伸ばし写真を見、その情報を提示する。
・ジャイルズ目録を参照し「六百年頃の良好な写本、薄いゴールドデン・イエロウ紙（golden yellow paper）、二四呎四分の一」と述べるが、書写年代をジャイルズの判断よりさらに百年後、玄宗の開元年間頃の盛唐期であろうと推測する。

・尾題「佛説提謂経卷下」。

・塚本佚文と対応する箇所は少なく（塚本佚文二三条中三条が一致。完全一致ではなく、多少の異同あり）、該当しない佚文は『提謂波利経』上巻であるか、または異本の系統に属するものであろうと述べる。

・S. 2051後半部分と、『分別善惡所起経』の内容とが酷似することを述べる。¹³⁾

・S. 2051の翻刻を掲載する（塚本佚文、『分別善惡所起経』との対照及び校異を附す）。

敦煌本『提謂波利経』諸本の関係について（新田）

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について（新田）

四六

【BD. 3715】（北京図書館本霜字一五号）

・ 原本、写真等未見。

・ 陳垣『敦煌劫余録』により「北京図書館本霜字十五号は、十八紙 三六〇行の佛説提謂五戒經并威儀（下巻）」、「最初の二行の首と最後の二行の尾とを」、「下持三十〜寶處巻下」と記している」と述べる。

・ 『敦煌劫余録』の首尾二行（下持三十〜宝処巻下）に該当する箇所がS. 2051には見られないうとして、S. 2051とBD. 3715との関係を、二巻本提謂經の異本であろうと述べる。

・ 『敦煌劫余録』に見られる「佛説提謂五戒經并威儀（下巻）」の経題により、『法華玄義』卷一〇下の引文、「又五戒經中、二長者得不起法忍、三百人得信忍、二百人得須陀洹果」や、『法華文句』卷四下の引文、「五戒經又云歸命、悉施衆生耳、調達臨終稱南無、未得稱佛、便墮地獄」に見られる「五戒經」、『大乘法苑義林章』卷一の引文、「第一時者、佛初成道、爲提謂波利等五百賈人、但説三歸五戒十善世間因果教、即提謂等五戒本行經是、未有出世善根器故」に見られる「五戒本行經」を同本であろうと述べる。

【Jx. 1657】

・ 原本、写真等未見であるが、『メンシコフ目録』の記述より、その首部「言譬如兩病人終不能相扶持師與弟」と、尾部「□□得譬如二人在須彌山上僉樓下之一人」とを載せ、S. 2051に該当箇所があることを述べる。

一九七一年「敦煌本提謂經の研究（下）——安世高訳分別善惡所起經との類似——」

【S. 2051】

・ S. 2051の内容を概説する。

【BD. 3715】

・尾題「佛説提謂五戒經」について、他の複数の經典中にも「提謂五戒經」（法華玄義私記）や「提謂波利五戒經」（和語灯録日講私記）等の経名が見られることを勘案し、『提謂波利經』の別称であろうと述べる。

一九七三年「ペリオ本「提謂經」について」

【P. 3732】

- ・フランス国立図書館の敦煌本調査の際、新たな『提謂波利經』写本と思われるP. 3732を实見。
- ・全五二二行、首尾欠、経題不明。書写年代を明記しないが唐代写本と判断する。
- ・S. 2051『提謂波利經』卷下とは全くの別本と述べる。
- ・塚本佚文のうち『歴代三宝紀』『仁王護国般若経疏』『弁正論』等と一致する箇所が見られることを指摘する。
- ・内容について、五行・五方・五藏・五戒・五岳などについて詳述していると述べる。
- ・『歴代三宝紀』に、曇靖は一卷本に五方五行を加して二卷本『提謂波利經』を撰述したとあることから、S. 2051・BD. 3715・Jx. 1657を卷下とする二卷本『提謂波利經』の上巻に該当するものと推測する。
- ・P. 3732の翻刻を提示する。

【BD. 3715】

- ・愛知学院大学図書館に収蔵された写真を見、その内容はS. 2051と同本であるがBD. 3715のほうが相当短く、S. 2051を補つものはないと述べる。
- ・S. 2051とBD. 3715とは経題は異なるが内容はほぼ同じであることから、『提謂波利經』はその内容に即して「提謂五戒經」と称される場合があったのであろうと推測する。
- ・後半一五六行にわたる「五戒威儀」の内容について簡述。

一九七六年『疑經研究』「提謂經と分別善惡所起經—疑經と真經—」

【BD. 3715】

・BD. 3715後半部「五戒威儀」の翻刻を附す。

牧田氏による敦煌本紹介の整理

	P. 3732	S. 2051	BD. 3715	Jx. 1657
現存行数	首尾欠。五二二行	首欠。行数言及なし	首欠。十八紙三六〇行 〔敦煌劫余録〕による	首尾欠。行数言及無し
首題	欠	欠	欠	欠
尾題	欠	佛説提謂經卷下	佛説提謂五戒經并威儀卷下	欠
巻次の判断	上巻	下巻	下巻	下巻
書写年代	唐代	玄宗の開元年間 (七一三〜七四一)頃	言及なし	言及なし
翻刻の有無	有り	有り	「五戒威儀」のみ有り	無し(『メンシコフ目録』首 尾計三三文字を記載)
他本との 内容関係	S. 2051(巻下)とは別本	BD. 3715、Jx. 1657を 包括。P. 3732とは別本	S. 2051(巻下)と同本	S. 2051(巻下)と同本
参照資料	一九七三年、フランス国 立図書館調査にて実見	京都大学人文科学研究所 蔵スタイン文書フィ ルムの引き伸ばし写真	愛知学院大学図書館に収蔵 される写真	現物・写真未見。『メンシ コフ目録』の情報による

従来『提謂波利經』テキストとして唯一参照可能であった塚本氏紹介の佚文が二次資料（引文）であり、その内容も全体のごくわずかであったのに対して、牧田氏紹介の敦煌本四写本は一次資料（『提謂波利經』自体の本文）を提供するものとして塚本氏紹介の佚文を質・量ともに凌駕し、『提謂波利經』のテキストを拡充させた。そして現在に至るまで牧田氏の論文に対する検証はなされておらず、『提謂波利經』の書誌学的研究は依然として牧田氏を第一線とする状況にある。

しかし、改めて当時の影印写真等の参照状況や氏の見解を検討すると、以下の問題点が指摘できる。

①牧田氏が写本の現物を実見したのはP. 3732のみであり、S. 2051・BD. 3715は写真を見、Jx. 1657に至っては目録上の情報に依るにすぎない

この問題に関しては、牧田氏当時の敦煌本テキスト環境では仕方のないことである。しかし現在では敦煌本四本とも影印出版され、さらにP. 3732・S. 2051はインターネット上で鮮明なカラー画像が公開されており、画像を用いた検討が可能である。

②敦煌本四写本間の関係を考慮してこなく

牧田氏は四写本間の関係について、「佛説提謂經卷下」の尾題を有するS. 2051を確実な『提謂波利經』テキストとして、これと本文が一致するJx. 1657を同じ『提謂波利經』巻下と比定し、同じくS. 2051と本文は一致するが尾題が異なるBD. 3715も『提謂波利經』巻下と比定、尾題「佛説提謂五戒經并威儀卷下」は『提謂波利經』の別称であろうと推測する。

またP. 3732についてはその内容（『歴代三宝紀』に記される特徴を備え、佚文と一致すること）から『提謂波利經』と判断した上で、本文はS. 2051とは一致しないため、上巻にあたるものであろうと述べる。

これらはいずれも本文内容による比較であり、遺例（写本）自体の比較は行っていない。もちろん、①で述べ

たような一九七〇年代当時のテキスト環境では、写本自体の比較は困難であり、これは牧田氏の研究の問題点ではなく、テキスト環境が充実したにも関わらず、今なお検討が行われていない現在の研究の問題点と言えよう。

③ D_x 1657 は経題不明かつ一三行程度の断簡であるにも関わらず、S. 2051 との一致から『提謂波利經』巻下として扱われている。

D_x 1657 は、首尾題を欠く経題不明の断簡である。対照可能なテキストとして「佛説提謂經卷下」の尾題を有する S. 2051 が存するため、その本文が『提謂波利經』巻下と一致することは確認できる。しかしたった一三行程度の短い断簡であるため、『提謂波利經』本文ではなく他書に引かれる引文部分である可能性も考慮される。

S. 2051 との対照の結果は、多少の文字の異同や出入りがあるものの概ね同内容と言って良いが、引文である可能性は捨てきれなく。

④ P. 3732 は経題不明であるにも関わらず、その内容から『提謂波利經』巻上であろうと紹介されている。首尾欠のため経題不詳の P. 3732 を、その内容がいくつかの佚文と一致すること、『歴代三宝紀』に挙げる『提謂波利經』の特徴、五行五方等を詳述していることが一致すること、そして下巻にあたる S. 2051 と本文とが一致しないことから、『提謂波利經』の巻上であろうと推測している。牧田氏はあえて述べないが、「提謂」と「波利」の名が出て、巻下である S. 2051 と同様仏と提謂との問答形式に終始することなどから、P. 3732 を同経巻上とする判断に一定の信憑性はあろう。しかし書誌学上、経題不明かつ対照可能な（確実に『提謂波利經』巻上と言える）別テキストが不在という状況で同写本を『提謂波利經』巻上と同定できるかと言えば、そうは言いきれない。つまり、巻下である S. 2051 の対とするには異本である可能性も残り、また抄出經典であるという可能性も否定できなく。

③・④に挙げた D_x 1657 と P. 3732 について、現在までに牧田氏の判断の問題点を指摘する批判はない。しか

し残存テキストがわずか四本しか発見されていない『提謂波利経』に関して、そのうち一本に一次資料（＝『提謂波利経』本文）であるか否かの疑いがあり、もう一本を『提謂波利経』巻上と断定できないということは、研究の上で留意する必要がある。

また③については、写真版や画像閲覧が容易になった今日、当時のテキスト環境では実現不能であった検討が可能になった。牧田氏が写真の閲覧にとどまり実見することのなかったS. 2051はネット上で鮮明なカラー画像が閲覧でき、BD. 3715もその影印が出版された。特に、牧田氏が目録の情報に依るしかなかったJix. 1657の影印が出版されたことは大きい。

これらの問題点を踏まえ、以下現在公刊・公開されている影印本・画像を用いた敦煌本『提謂波利経』の書誌学的検討を行う。

三、敦煌本『提謂波利経』の書誌学的検討

本章では公刊・公開されている敦煌本四写本の影印及び画像に基づき比較検討を行い、従来指摘されてこなかった四写本間の書誌的關係について考察する。使用する影印・画像は以下の通りである。

[P. 3732] 『法国国家図書館藏敦煌西域文献』²⁷¹⁴

[S. 2051] 『英国国家図書館藏敦煌遺書』³²¹⁵

[BD. 3715] 『国家図書館藏敦煌遺書』第五一冊¹⁶

[Jix. 1657] 『俄藏敦煌文献』⁸¹⁷

敦煌本『提謂波利経』諸本の関係について（新田）

(一) 写経形式の比較

1 一紙あたりの行数と一行の字数の比較（資料1）
画像を用いることで界高や行間、一紙あたりの行数といった写経形式の検討が可能となった。四写本それぞれの一紙あたりの行数と、各紙第二行目の字数とを一覧にした。
それぞれの形態をまとめると次のようになる。

【P. 3732】 一紙110～111行、一行あたり17～19字。

【BD. 3715】 一紙19～210行、一行あたり17～18字。

【Dx. 1657】 一紙未滿の断簡であるため行数算出不能、一行あたり17字。

【S. 2051】 一紙28行、一行あたり17字。

字数はいずれも概ね一七字前後である。一紙あたりの行数は、P. 3732・BD. 3715は一行前後の差はあるものほは同じ、S. 2051のみ大きな差が生じた。

2 行間の比較（資料2）

四写本を縦に並べ、（それぞれ影印写真の縮尺は不明なため）右端の界線の位置を揃えて界幅が同じになるよう拡大した時の文字の大きさの比較を示した。P. 3732・BD. 3715・Dx. 1657の三本は概ね同じであり、S. 2051のみ文字の大きさに違いが見られた。

【資料1】一紙あたりの行数と一行の字数の比較

	P.3732 (首・尾欠)	BD.03715 (首欠)	Дx.01657 (首・尾欠)	S.2051 (首欠)
第一紙	20行・17字 (4)	20行・17字	13行・17字 (4)	20行・17字
第二紙	21行・17字	20行・17字		28行・17字
第三紙	21行・17字 (3)	20行・17字		28行・17字
第四紙	21行・17字 (3)	20行・17字		28行・17字
第五紙	21行・17字	21行・17字		28行・17字
第六紙	20行・19字	20行・17字		28行・17字
第七紙	20行・17字	20行・17字		28行・17字
第八紙	21行・17字	20行・17字		28行・17字
第九紙	21行・17字	20行・17字 (3)		28行・17字
第一〇紙	20行・17字	20行・17字		28行・17字
第一一紙	21行・17字	19行・17字		28行・17字
第一二紙	21行・17字	20行・17字 (3)		28行・17字
第一三紙	20行・17字	20行・17字		28行・17字
第一四紙	20行・17字	20行・18字		28行・17字
第一五紙	20行・17字	20行・17字		7行・17字
第一六紙	20行・17字	20行・17字 (3)		
第一七紙	20行・17字	20行・18字		
第一八紙	20行・17字	19行・17字		
第一九紙	20行・17字			
第二〇紙	20行・17字 (6)			
第二一紙	20行・17字			
第二二紙	20行・17字			
第二三紙	20行・17字			
第二四紙	20行・17字			
第二五紙	20行・17字			
第二六紙	16行・17字			

※敦煌本『提謂波利経』四写本における一紙あたりの行数・字数を示した。

※一行の字数は各紙第二行目を採録した。破損・偈文等の場合は次下を採録し、その行数を（ ）で示す。

※P.3732に見られる後筆は字数算出の対象としない。

【資料2】行間の比較

<p>情也色痛養七 情耳聽聲為一 為四情身更細 是三本本淨如 淨但坐所起音 内六情目致大 者曰何謂為五 作人行得生人</p>	<p>P.3732</p>
<p>中不長者等五 劫百劫千劫万 中天佛言億億 中如是易耳求 可計倍不可為 生生服人身甚 土以為器燒成一 合為本土可得合</p>	<p>BD.3715</p>
<p>度脫長者提謂 甚難天中天 奉行不敢違夫 内著心中皆白 人道如佛言者 一念來一過滅 百心百念以身 不可信是故知</p>	<p>IX.1657</p>
<p>聽作七日施 謂曰佛默然 及五百貴人 上世尊并及 作沙門光衛 白佛言五戒 難為度怨畏 若有善男子</p>	<p>S.2051</p>

3 文字の大きさと間隔の比較（資料3）
 四写本を横に並べて界高を揃え、文字の大きさと間隔の比較を示した。こちらでもS2051を除く三本は概ね同じである。

【資料3】文字の大きさと間隔の比較

<p>謂白佛言五戒為度无極為度无邊除生死 身作沙門光衛世尊七日七日施訖長者提 奉世上世尊并及諸天龍鬼神天龍鬼神皆化</p>	<p>能相度脱長者提謂白佛言甚微妙与人五 戒為甚難天中天 人重注大難天中天</p>	<p>佛言人於世間兩舌惡口忘言自貢高綺語 誹謗聖道嫉賢妬能呶呶言從是得五惡何</p>	<p>第十二法十二月小節三百六十法一歲三 百六十日成就一身王道如此餘骨為盡餘</p>
S.2051	Dx.01657	BD.03715	P.3732

(二) 内容による BD. 3715・Jx. 1657 の関係

従来、P. 3732 は『提謂波利經』上巻、S. 2051・BD. 3715・Jx. 1657 は下巻とされてきたが、改めてそれぞれの関係を検討する。唯一の上巻であり比較対象がない P. 3732 は一旦措き、まず下巻とされる三本を取り上げる。

牧田氏によれば BD. 3715・Jx. 1657 の内容はいずれも S. 2051 に包括されることが知られるため、S. 2051 を基準として BD. 3715・Jx. 1657 が Jx. に相当するの^がか、両本の位置を確認する（【資料 4】S. 2051 に基づく Jx. 1657・BD. 3715 の接続）。

Jx. 1657 末尾と BD. 3715 首部とは、いずれも行間で縦に分断されている。S. 2051 の内容と照らすと、Jx. 1657 末尾と BD. 3715 首部との内容が間断なく接続することがわかる。これは、BD. 3715 と Jx. 1657 とが本来同一の写本であった可能性を示唆するものである。

【資料 4】

S. 2051

聞經歡喜一一內着心中皆白佛言一切衆
 生欲作行求係人道如佛言者甚難甚難天
 中天人心一念去一念來一過滅一復生心
 之發滑造作无端百心百念以成百身人意難
 護心為身本心不可見不可信是故知人
 身難得度世甚危甚難天中天佛言如法所
 言佛語无有異人身實難得解如二人一人
 在須弥山上織縷下一人在山下持針仰
 迎縷使入針鼻中相去三百卅六万里復有
 隨嶽猛風吹之寧能使縷值針鼻乳中不長
 者提謂五百人等皆言不可相值天中天十
 劫百千億万劫終不能使縷值針鼻中天中
 天佛言億億万劫不可計劫會復值針鼻乳
 中如是易可求人身難得於此百千万億倍
 不可計倍不可為喻人身實難得身死欲使
 還服人身甚大難解如凡器五取好細未主
 以為器燒成可用久久破以棄之欲令還合
 為本主可得合不日不可合佛言善是破器

一內着心中皆白佛言一
 求係人道如佛言者甚難甚難天中天人心
 念法一念來一過滅一復生心之發滑造作
 无端百心百念以成百身人意難護身為心本心不
 不可信是故知人身難得度世甚危
 天中天佛言如法所言佛語不異
 一人一人在須弥山上余縷下一人

在山下持針仰
 迎縷使入針鼻中相去三百
 三十六万里復有風風吹之寧能使縷入針
 鼻中不長者等五百人皆言不相值天中天
 十劫百劫千劫万劫終不能使縷入針鼻
 天中天佛言億億万劫不可計劫會復值針
 乳中如是易耳求人身難於此百千万億倍
 不可計倍不可為喻人身實難得身死欲使
 還生服人身甚大難解如凡器五取好
 赤土以為器燒成可用久久破已棄之欲令
 還合為本主可得合不日不可合佛言善是破器

(二) 字体・書風の比較

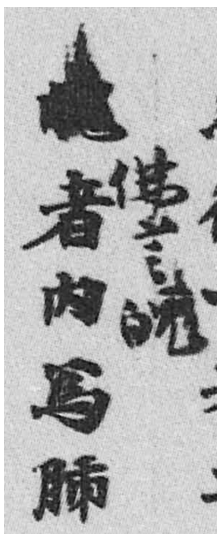
内容による BD. 3715 と Jx. 1657 との関係の検討にて浮上した、両断簡が本来同一の写本であるという可能性を念頭に置き、四写本それぞれに使われる字体や書風を比較検討する。方法としては、四写本に共通する文字を画像から切り出し一覧にすることで使用される字体や書風の特徴を比較し、四写本の間を考察する【資料5】
字体・書風の比較。

なお字体・書風の比較に際して注意を要するのが、一本の写本が一人の書写者の手になる写経であるか、という点である。写経の際に複数の書写者が途中で交代して筆をとり、一本の経を完成させるという場合は多々あり、字体・筆致を比較する際にはこの可能性を考慮しなければならない。筆者の見限り、敦煌本四本のうち S. 2051・BD. 3715・Jx. 1657 には、途中で明らかに筆跡が変わったと思われる箇所はなかった。P. 3732 に関しても、本文部分は首尾一貫して同一人物の書と認められる。ただし、破損裏打ち部分の補写（図1）や行外の字句の補入（図2）など、後代別人のものと思われる淡墨の補写訂正が見られ、これらは比較対象から除いた。また BD. 3715 については、後半「五戒威儀」部分を除き、『提謂波利經』巻下のみを対象範囲とした。

〈図1〉裏打ち補写部分(P. 3732 六八行、三文字目「戒」字)



〈図2〉行外補入(P. 3732 一七一行右、「佛言魄」)



【資料5】字体・書風の比較

6. 「師」



1273.12 文字目

5. 「能」



1340.14 文字目

4. 「譬」



(な
し)

3. 「為」



1334.13 文字目

2. 「得」



1089.11 文字目

1. 「復」



1286.11 文字目

P.3732

6. 「師」



1032.16 文字目

5. 「能」



1004.12 文字目

4. 「譬」



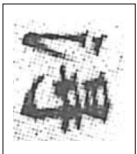
1008.10 文字目

3. 「為」



1007.7 文字目

2. 「得」



1010.7 文字目

1. 「復」



1002.6 文字目

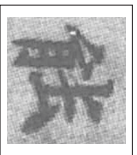
BD.3715

6. 「師」



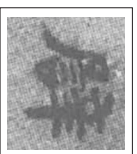
1002.14 文字目

5. 「能」



1002.10 文字目

4. 「譬」



1001.3 文字目

3. 「為」



1005.2 文字目

2. 「得」



1011.12 文字目

1. 「復」



1009.10 文字目

J1×1637

6. 「師」



1068.2 文字目

5. 「能」



1176.13 文字目

4. 「譬」



1227.17 文字目

3. 「為」



1184.3 文字目

2. 「得」



1029.12 文字目

1. 「復」



1081.8 文字目

S.2051

12. 「身」



1090.12 文字目

11. 「病」



1035.9 文字目

10. 「知」



1508.4 文字目

9. 「知」



1204.4 文字目

8. 「念」



1176.13 文字目

7. 「兩」



1160.15 文字目

P.3732



1185.5 文字目



1183.9 文字目



1188.13 文字目



1092.15 文字目



1174.12 文字目



1100.8 文字目

BD.3715



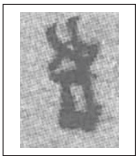
1011.010 文字目



1002.6 文字目



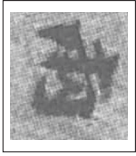
1011.8 文字目



1003.7 文字目



1009.4 文字目

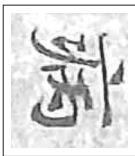


1002.5 文字目

J1x1657



1046.1 文字目



1036.5 文字目



1394.9 文字目



1055.3 文字目



1182.6 文字目



1349.8 文字目

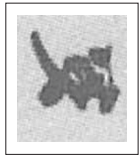
S.2051

18. 「報」



1292.13 文字目

17. 「多」



1205.8 文字目

16. 「土」



1058.1 文字目

15. 「受」②



1284.11 文字目

14. 「受」①



1333.12 文字目

13. 「天」



1114.11 文字目

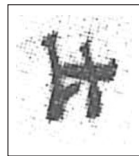
P.3732



1017.6 文字目



1015.16 文字目



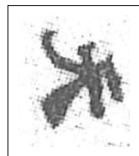
1009.2 文字目



1035.6 文字目



1036.13 文字目



1071.11 文字目

BD.3715

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

天

Jx.1657

1008.13 文字目

S.2051



1206.7 文字目



1202.9 文字目



1231.10 文字目



1124.6 文字目



1076.16 文字目



1059.12 文字目

24. 「解」



1210.10 文字目

23. 「後」



1230.9 文字目

22. 「間」



1082.13 文字目

21. 「兄」



1279.8 文字目

20. 「逆」



1259.4 文字目

19. 「櫃」

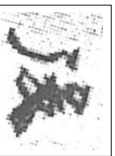


1301.13 文字目

P.3732



1073.9 文字目



1064.3 文字目



1055.14 文字目



1055.3 文字目



1031.10 文字目



1020.13 文字目

BD.3715

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

Jx.1657



1016.17 文字目



1254.7 文字目



1274.5 文字目



1244.10 文字目



1379.12 文字目



1320.15 文字目

S.2051

30. 「歳」



1390.5 文字目

29. 「極」



1198.11 文字目

28. 「害」



1031.2 文字目

27. 「虫」



1418.5 文字目

26. 「界」



1081.9 文字目

25. 「悉」

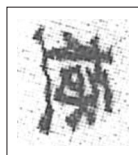


1257.1 文字目

P.3732



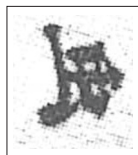
1083.11 文字目



1082.10 文字目



1081.16 文字目



1081.13 文字目



1076.16 文字目



1037.11 文字目

BD.3715

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

J1x1657



1157.4 文字目



1273.11 文字目



1272.17 文字目



1272.13 文字目



1004.13 文字目



1218.3 文字目

S.2051

36. 「敬」



12367 文字目

35. 「分」



11009 文字目

34. 「亡」



118915 文字目

33. 「老」



10485 文字目

32. 「取」



14304 文字目

31. 「敬」



14181 文字目

P.3732

11024 文字目



109217 文字目



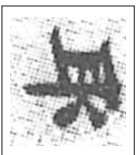
10921 文字目



10912 文字目



10869 文字目



10853 文字目



BD.3715

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

J1x1637

136014 文字目



10195 文字目



12797 文字目



10857 文字目



119513 文字目



11318 文字目



S.2051

42. 「足」



11267 文字目

41. 「年」



1514,17 文字目

40. 「喜」



1307,3 文字目

39. 「財」②



1042,1 文字目

38. 「財」①



1301,10 文字目

37. 「赤」

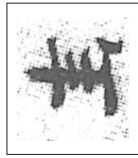


1038,2 文字目

P.3732



11238 文字目



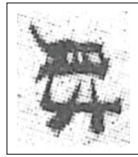
1121,7 文字目



1113,6 文字目



1042,14 文字目



1109,15 文字目



1106,4 文字目

BD.3715

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

J1x1637



1316,6 文字目



1314,1 文字目



1304,5 文字目



1283,1 文字目



1239,5 文字目



1014,9 文字目

S.2051

48. 「仰」



1138.15 文字目

47. 「非」



1172.9 文字目

46. 「増」



1514.16 文字目

45. 「形」



1199.17 文字目

44. 「低」



1451.5 文字目

43. 「明」



1136.13 文字目

P.3732



1171.2 文字目



1157.7 文字目



1156.8 文字目



1148.12 文字目



1129.14 文字目



1124.16 文字目

BD.3715

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

Jx.1657



1092.10 文字目



1100.6 文字目



1006.6 文字目



1342.3 文字目



1322.17 文字目



1227.2 文字目

S.2051

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

52. 「客」



1483.11 文字目

51. 「散」



1504.5 文字目

50. 「礼」



1185.14 文字目

49. 「乱」



1489.3 文字目

P.3732

BD.3715



1181.10 文字目



1174.3 文字目



1149.17 文字目



1172.13 文字目

(なし)

(なし)

(なし)

(なし)

J1x1657

S.2051



1153.7 文字目



1369.8 文字目



1026.9 文字目



1362.3 文字目

- 1 「復」…P. 3732・BD. 3715・Jx. 1657 は、「𠂔(きょうにんべん)」が「𠂔(さんずい)」になる。
- 2 「得」…「𠂔」同。
- 3 「為」…P. 3732・BD. 3715・Jx. 1657 は、「𠂔」二画の二点が特徴的であり、下部の四点も一本の横画になる。
- 7 「画」…P. 3732・BD. 3715・Jx. 1657 は、中央の縦画が一画目の横画から突き出している。
- 13 「天」…P. 3732・BD. 3715・Jx. 1657 は、三画目の左はらいがやや上向きになる。
- 14・15 「受」…P. 3732・BD. 3715・S. 2051 とともに、「𠂔」二種の字体が見られた。
- 16 「土」…S. 2051 は、最終画が点ではなく、横に引く形になる。
- 17 「多」…P. 3732・BD. 3715 は、上部が特徴的かつ最終画が下に突き抜ける。
- 21 「兄」…P. 3732・BD. 3715 は、「𠂔」部の最終画が左右に突き出ている。
- 24 「解」…P. 3732・BD. 3715 は、右の旁が「年」に似た形になり、S. 2051 は「辛」に似た形になる。
- 27 「𠂔」…P. 3732・BD. 3715 は、縦画の上に点がある。
- 30 「𠂔」…P. 3732・BD. 3715 は、「𠂔」部が省略されて三点になる。
- 32 「取」…P. 3732・BD. 3715 は、「𠂔」部が特徴的な形になる。
- 38・39 「財」…P. 3732・BD. 3715・S. 2051 とともに、「𠂔」二種の字体が見られた。
- 43 「明」…P. 3732・BD. 3715 は、「日」と「月」の大きさが同じ。
- 46 「増」…P. 3732・BD. 3715 は、「土(ちちへん)」三画目の最後に一旦筆を止めてから、上に撥ね上げている。
- 49 「𠂔」…P. 3732・BD. 3715 は、右のへくりに一点付加されて「𠂔」となっている。
- 50 「𠂔」…S. 2051 も含めて同。

(※数字は【資料5】の漢字番号)

比較の結果は以下の通りである。

・ BD. 3715 と Dx. 1657 とは使用する字体・書風が酷似しており、上述した内容の接続を勘案すると、両本は本来同一写本であると推定される。

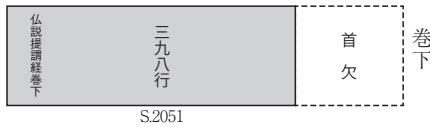
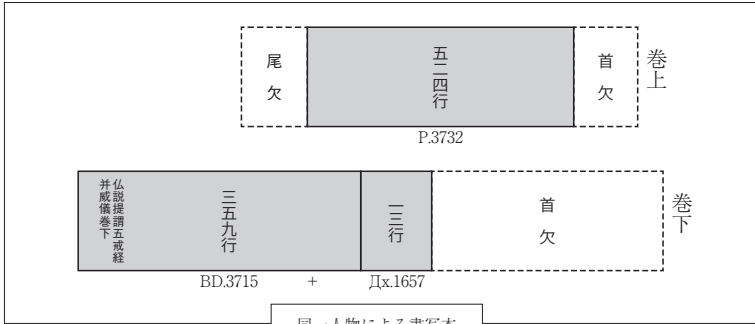
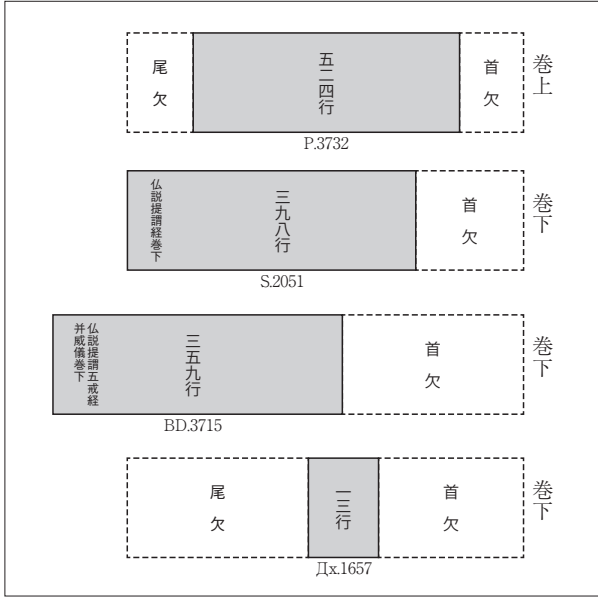
・ 「BD. 3715 + Dx. 1657」≠ P. 3732 とも字体・書風が酷似することから、P. 3732 ≠ BD. 3715・Dx. 1657 と僚巻であると推測される。

書誌学的検討の結果、『提謂波利經』現存敦煌本四写本のうち BD. 3715・Dx. 1657 間に内容上の接続が確認でき、また両巻と P. 3732 の三本間に写経形式と字体・書風の酷似が認められた。この結果から、BD. 3715 と Dx. 1657 とは本来一連の写本であり、「BD. 3715 + Dx. 1657」（巻上）と P. 3732（巻上）とは、本来僚巻であった蓋然性が高いことが言える。

敦煌写本において、現在異なる所蔵機関に収蔵されている複数の写本が本来一具の經典であったという事例は多々あり、『提謂波利經』三本についても、いずれかの時に分断され、それぞれ北京・ロシア・フランスへと運び出されたと推定される。

BD. 3715 と Dx. 1657 とが本来一連の写本であり、さらに P. 3732 が僚巻であることで、敦煌本『提謂波利經』四本の関係は以下のように整理される。

- ① 首尾題を欠く Dx. 1657 が「提謂五戒經并威儀卷下」と比定され、引文である可能性が解消される。
- ② 従来内容から『提謂波利經』と推定されるも、首尾題を欠き、対照可能な別テキストも不在であった P. 3732 の経題が、「提謂五戒經并威儀（巻上）」と比定される。
- ③ 従来、巻下（S. 2051）と本文が一致しないという消極的理由より巻上と推測されてきた P. 3732 が、「BD. 3715 + Dx. 1657」と一連の内容を有する本文であることが書誌学的に裏付けられる。



敦煌本『提謂波利経』諸本の関係について（新田）

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

三

④サンクトペテルブルグ所蔵の敦煌文書中には、トルファンや黒水城等敦煌以外の地域から出土した文書が混淆していることが指摘されており、出土地域の弁別は大きな課題となっているが、Dx. 1657についてはP. 3732と僚卷であることから、敦煌本と確定できる。

結 論

以上、『提謂波利經』研究の書誌的基盤となつてゐる牧田氏の研究を批判的に検証し、現在公刊されている『提謂波利經』敦煌本四本、トルファン一本の情報を影印画像及び目録等により確認し、敦煌本の関係を書誌学的観点から検討することで整理した。

従来、巻下(S. 2051)と本文が一致しないという、消極的理由により巻上と推測されてきたP. 3732が「BD. 3715+Dx. 1657」と同一書写本であり、巻上・巻下として本来一具の内容を有するテキストであることが書誌学的に裏付けられた。これにより、P. 3732と「BD. 3715+Dx. 1657」(提謂并五戒經巻下)を一連のテキストとして通読することが可能となり、「BD. 3715+Dx. 1657」と同内容を有するS. 2051は「BD. 3715+Dx. 1657」の欠損部分を補填するものと位置付けられる。本論では公刊された影印画像に基づき検証を行ったが、今後各所蔵機関での原本調査を実施し、紙質・界高・界幅等の情報を確認することで、本結論を裏付けたい。

註

(1) 『出三藏記集』卷五「新集疑經偽撰雜錄第三」

提謂波利經二卷(舊別有提謂經一卷)。

右一部、宋孝武時、北國比丘曇靖撰。

(大正五五、三九頁上) ※()内は割注

(2) 塚本善隆「支那の在家仏教特に庶民仏教の一經典―提謂波利經の歴史―」『東方學報』京都一二号三分冊、一九四一年、二九三―三九三頁初出。後に同氏『支那仏教史研究』北魏篇(清水弘文堂書房、一九六九年、二九三―三五四頁)、『北朝仏教史研究』(塚本善隆著作集第二卷、大東出版社、一九七四年、一八七―二四〇頁)に収録される。以下、本稿において同論文を用いる際には全て塚本善隆著作集第二卷『北朝仏教史研究』に収録される本文・頁数を示す。

(3) 牧田氏による敦煌本紹介については後述する。

(4) 西脇常記『イスタンブール大学図書館所蔵トルファン出土漢語断片研究』(同志社大学文学部 文化史学科 西脇研究室編集発行、二〇〇七年、六一―七二頁)

(5) 山口大輔(意眞)『提謂波利經』佚文補遺(『仏教学研究』第六七号、二〇一一年、七一―九三頁)

(6) 曹凌『中国仏教疑偽經綜録』五七―八七頁(上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社、二〇一一年)

(7) 牧田諦亮「中国仏教における疑經研究序説―敦煌出土疑經類をめぐって―」(『東方學報』京都第三五冊、一九六四年、三三七―三九六頁)

(8) 牧田諦亮「敦煌本提謂經の研究(上)―安世高譯分別善惡所起經との類似―」(『仏教大学大学院研究紀要』創刊号、一九六八年、一三七―一八五頁)

(9) 牧田諦亮「敦煌本提謂經の研究(下)―安世高譯分別善惡所起經との類似―」(『仏教大学大学院研究紀要』第二号、一九七一年、一六五―一九七頁)

(10) 牧田諦亮「ペリオ本『提謂經』について」(『藤原弘道先生古稀記念 史学仏教学論集』一九七三年、一一四三―一一六二頁)

(11) 牧田諦亮『疑經研究』(牧田諦亮著作集第一卷、臨川書店、二〇一四年、一四八―二二一頁)

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

七四

(12) 原著は『Описание китаийских рукописей дунхуанского фонда Института народов Азии. 1-2. Москва. 1963-1967。以下略称『メンシコフ目録』。

(13) 『分別善惡所起經』大正一七。経録上の初出は梁代撰『出三藏記集』失訳雑経録中においてであるが、隋代の『歴代三宝紀』では理由なく後漢の安世高訳とされ、以降その記述が踏襲されている。同論文中で牧田氏は『歴代三宝紀』の判断は信憑性を欠くと述べられ、また『提謂波利經』との内容比較から、『分別善惡所起經』は『提謂波利經』を模して撰述された疑経であろうと推測する。

(14) 『法国国家図書館藏敦煌西域文献』②⑦(法国国家図書館編、上海古籍出版社、二〇〇二年、一七二～一八七頁)

(15) 『英国国家図書館藏敦煌遺書』③②(上海師範大学・英国国家図書館合編、方廣鎔・呉芳思主編、広西師範大学出版社、二〇一四年、二五一～二六一頁)

(16) 『国家図書館藏敦煌遺書』第五一冊(任繼愈主編、北京図書館出版社、二〇〇七年、三八二～三九二頁)

(17) 『俄藏敦煌文献』⑧(孟列夫・錢伯城主編、上海古籍出版社、一九九七年、二八〇頁)

(18) 榮新江『俄藏敦煌文献』中的黑水城文献(『辨偽与存真——敦煌学論集』上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、二〇一〇年、一六五～一八〇頁)。岩尾一史『敦煌文書における紛れ込み問題覚書』(『敦煌写本研究年報』第六号、二〇一二年、一三九～二四七頁)。関尾史郎『サンクトペテルブルグ所藏敦煌文献をめぐる問題と動向』三四～四〇頁(『敦煌学国際聯絡委員会通訊』創刊号、敦煌学国際聯絡委員会、二〇〇三年)

附「引文一覽」「提謂波利經」本文・引文対照

引文一覽

敦煌本『提謂波利經』四本の欠部を補う資料として、諸文献中に見られる『提謂波利經』の引文がある。『提謂波利經』の引文は塚本善隆、山口大輔、曹凌三氏によって提示されてきたが、それらの中には重複があり、また曹氏提示の引文に関しては敦煌本との対照が行われていない。そのため改めて三氏提示の引文を整理し、通し番号を附した。

〔凡例〕

・引文①～⑮は現存の敦煌本に一致・類似が見られるもの、もしくは該当箇所（P. 3732の一行目以前か、P. 3732の五二四行目以後またはS. 2011の一行目以前）が推測される佚文であり、引文⑯～⑳ は該当箇所不明の佚文である。

・割注はへゝ内に示した。

・卍統藏経については中国仏教会影印卍統藏経委員会によるリプリント版を使用し、巻数表記も同版に従った。

・塚本善隆氏並びに曹凌氏提示の『弁正論』の引文、

提謂経云。不殺曰仁。仁主肝木之位。春陽之時萬物盡生。正月二月少陽用事。養育群品。好生惡殺殺者無仁。不邪曰義。義主肺金之位。七月八月少陰用事。外防嫉妬危身之害。内存性命竭精之患。禁私不姪。姪者無義。不飲酒曰禮。禮主心火之位。四月五月太陽用事。天下太熱萬物發狂。飲酒致醉心亦發狂。口爲妄語亂道之本。

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について（新田）

身故危亡不盡天命。故禁以酒。酒者無禮。不盜曰智。智主腎水之位。十月十一月太陰用事。萬物收藏。盜者不順。天以得物藏之。故禁以盜。盜者無智。不妄曰信。信主脾土之位。三月六月九月十二月中央用事。制御四域惡口。傷人禍在口中。言出則殃至。氣發則形傷。危身速命。故禁以舌。舌者無信。（『弁正論』卷一、大正五二、四九四頁下一四〇二八行。塚本一九四一、三二三〇三三四頁（佚文二二）、曹二〇一一、六六頁）は、P. 3732 の二二二～六四頁の要略と思われるため除外した。

・山口氏は佚文二として「提謂經云、心如帝王。皆肉團心也。」（『般若心經疏語謀鈔』卷一、己統藏四一、三三二六頁上一行）。山口、七六頁）を挙げた上で、これは『釈禪波羅蜜次第法門』卷八「心爲大王上義下仁故。居在百重之内。」（引文③）の要略であるとする。筆者もこれに従い、ここでは採録しない。

①『華嚴經疏鈔玄談』卷四、唐・澄觀（己統藏八、二二八丁ウ下一六行～二二九丁オ上三行）

言提胃雖說戒善等者彼說。如來在樹王下成道。於七日中、無人知佛得阿耨多羅三藐三菩提。唯提胃波利此二居士。明究陰陽、鑽龜易卜。知佛成道、名爲樹神。提胃獻麩、四天王奉鉢、如來受已。始爲提胃說世間因果。

②『歷代三寶紀』卷九、隋・費長房（大正四九、八五頁中九～一〇行）

見其文云。東方太山。漢言代嶽。陰陽交代故謂代嶽。

③『釈禪波羅蜜次第法門』卷八、隋・智顗（大正四六、五三二頁下一八～二六行）

心爲大王上義下仁故。居在百重之内。出則有前後左右官屬侍衛。肺爲司馬。肝爲司徒。脾爲司空。腎爲大海中有神龜。呼吸元氣行風致雨通氣四支。四支爲民子。左爲司命。右爲司錄。主錄人命。齋中太一君亦人之主柱。天大將軍特進君王。主身內萬二千大神。太一有八使者八卦是也。合爲九卿。三焦關元爲左社右稷主姦賊。上焦通氣入頭中爲宗廟。

④『釈禪波羅蜜次第法門』卷八、隋・智顛（大正四六、五三二頁中一〇～一六行）

肺爲大夫在上下捨不義肝。爲尉仁心在中央稟種種脾。在其間平五味。腎在下衝四氣增長。七體成身骨以柱之髓以膏之筋以縫之。脈以通之血以潤之肉以裹之皮以覆之。以是因緣則有頭身手足大分之軀。餘骨爲齒。餘肉爲舌。餘筋爲爪。餘血爲髮。餘皮爲耳。

⑤『釈禪波羅蜜次第法門』卷八、隋・智顛（大正四六、五三二頁上二三行～中四行）

小腸爲心府。心赤小腸亦赤。心爲血氣。小腸亦通血氣。主潤於心入一身。故大腸爲肺府。肺白大腸亦白。主殺物益肺成化一身。胃爲脾府。胃黃脾亦黃。胃亦動作黃開通理脾臟氣入四支。膀胱爲腎府。腎府黑膀胱亦黑。通濕氣潤腎。利小行腸故三焦合爲一府分。各有所主。上焦主通津液清溫之氣。中焦主通血脈精神之氣。下焦主通大便之物。三焦主利上下。五臟之神分治六府。六府之氣以成五官之神。主治一身。

⑥『維摩經玄疏』卷五、隋・智顛（大正三八、五四八頁中二四～二五行）

出入無亂往來無間。統御一身以立道根。

⑦『大乘法苑義林章』卷一唐・窺基（大正四五、二四八頁上八～一一行）

提謂經說。五百價人將受五戒。先懺悔彼五逆十惡謗法等罪。得四大本淨。五陰本淨。六塵本淨。吾我本淨。

⑧『大乘法苑義林章』卷一唐・窺基（大正四五、二四八頁上一～一四行）

時提謂等得起法忍。三百價人得柔順忍。二百價人得須陀洹果。四天王等得柔順忍三百龍王得信忍。自餘天等發無上道意。十億天人皆行菩薩十善。

⑨『梵網經古述記』卷下末、新羅・大賢（大正四〇、七一三頁下二〇～二二行）

年三長齋者。提謂經云。正月本齋十五日。五月本齋十五日。九月本齋十五日。三齋因緣如經廣說。

⑩『義楚六帖』卷六、齋會「三長齋日」、宋・義楚『義楚六帖』古典叢刊之二、⁽¹⁾一二二頁下二八丁裏八行〜一二三頁上二九丁表二行）

〔又白佛言。何故月有六日宜齋。佛曰。八日遣使者下。十四日太子下。十五日四王下。二十三日使者復下。二十九日太子復下。三十日四王復下。皆在世間。錄其善惡。錄籍六卷。五處錄籍定罪福。是以立六日。須齋助善止惡。〕

⑪『法苑珠林』卷八八、唐・道世（大正五三、九二八頁中二三〜一五行）

又提謂經云。年三長月六齋三明日月燈火下及八王日。亦名八節日。竝須禁之（八王日如下述）若受不妄語戒者。

⑫『法苑珠林』卷八八、唐・道世（大正五三、九三三頁中二七〜九三三頁上六行）

又提謂經云。提謂長者白佛言。世尊。歲三齋皆有所因。何以正用正月五月九月。六日齋用月八日十四日十五日二十三日二十九日三十日。佛言。正月者。少陽用事。萬神代位。陰陽交精。萬物萌生。道氣養之。故使太子正月一日持齋寂然行道。以助和氣長養萬物。故使竟十五日。五月者。太陽用事。萬物代位。草木萌類。生畢百物。懷妊未成。成者未壽。皆依道氣。故持五月一日齋。竟十五日。以助道氣。成長萬物。九月者。少陰用事。乾坤改位。萬物畢終。衰落無牢。衆生蟄藏。神氣歸本。因道自寧。故持九月一日齋。竟十五日。春者萬物生。夏者萬物長。秋者萬物收。冬者萬物藏。依道生沒。天地有大禁。故使弟子樂善者避禁持齋。救神故爾。長者提謂白佛言。三長齋何以正用一日至十五日。復言。如何名禁。佛言。四時交代陰陽易位。歲終三覆八校一月六奏。三界皓皓五處錄籍。衆生行異五官典領。校定罪福行之高下。品格萬途。諸天帝釋太子使者。日月鬼神地獄閻羅百萬神衆等。俱用正月一日五月一日九月一日。四布案行帝王臣民八夷飛鳥走獸鬼龍行之善惡。知與四天王月八日十五日盡三十日所奏同不。平均天下使無枉錯。覆校三界衆生罪福多少所屬。福多即生

天。上卽勅四鎮五羅大王司命。增壽益算。下閻羅王攝五官除罪名。定福祿故。使持是三長齋。是故三覆八校者八王日是也。亦是天帝釋輔鎮五羅四王地獄王阿須輪諸天。案行比校定生注死。增減罪福多少。有道意。無道意。大意小意。開解不開解。出家不出家。案比口數。皆用八王日何等八王日。謂立春春分立夏夏至。立秋秋分立冬冬至。是爲八王日。天地諸神陰陽交代。故名八王日。月八日十四日十五日二十三日二十九日三十日。皆是天地用事之日。上下弦望朔晦皆錄命上計之日。故使於此日自守持齋。以還自校使不犯禁。自致生善處。

⑬『四分比丘尼鈔』卷中之下、唐・道世（巳統歲六四、六九丁、下二、四行）
提謂經云南者歸無者命佛者覺（此云歸命覺也）又南者禮無者大佛者壽（此云禮大壽也）。

⑭『法華玄義』卷一〇、隋・智顛（大正三三、八〇四頁上四、五行）

又彼經云。五戒爲諸佛之母。欲求佛道讀是經、欲求阿羅漢讀是經。

⑮『法苑珠林』卷二三、唐・道世（大正五三、四五五頁中七、九行）

又提謂經云。如有一人在須彌山上以纖縷下之。一人在下持針迎之。中有旋嵐猛風。吹縷難入針孔。

⑯『法華玄義私記』卷一〇、日本鎌倉・証真（『大日本仏教全書』第二冊、三六〇頁下一四行、三六一頁上三行）

佛言。持五戒爲人。行十善生天。不償作畜生。慳貪作餓鬼。破戒入地獄。是爲五道之行。提謂白言。願重說十善行。佛言十善者。同出天地之數。不殺（仁也）。不盜（智也）。不妄言綺語兩舌（信也）。此五行屬天。不貪不恚不婬不惡口（義也）。不飲酒（禮也）。此五行屬地。（乃至）身三口四意三是爲五戒。分得十善。十善攝五戒。

⑰『婦戒要集』卷中、清・弘贊（巳統歲一〇七、六九丁、上五、一六行）

故提謂經云。五戒者。天下大禁忌。若犯五戒。在天則違五星。在地則違五嶽。在方則違五帝。在身則違五藏。如是等世間違犯無量。若約出世。犯五戒者。則破五分法身。及一切佛法。所以者何。五戒是一切大小乘尸羅

根本。若犯五戒。則不得更受大小乘戒也。若能堅持。即是五大施。故佛言。一切施中。施無畏。最爲第一。是故我說五大施者。即是五戒。如是五戒。能令衆生離五怖畏。是五種施。易可修行。自在無礙。不失財物。能得無量無邊福德。離是五施。不能獲得須陀洹果。乃至阿耨多羅三藐三菩提。此五通名戒者。以防止爲義。能防惡律儀無作之非。止三業所起之惡。故名防止。

⑱ 『法華玄義』卷一〇、隋・智顛（大正三三、八〇四頁上八～一一行）

又云。五戒天地之根、衆靈之源、天持之和陰陽、地持之萬物生、萬物之母、萬神之父、大道之元、泥洹之本。『仁王經科疏』卷一、明・真貴（卍統歲九四、四五四丁上七一行～四五五丁上六一行）

按古疏引提謂經云。必說五戒。不言四六者。以五是天下之正數故。謂在天爲五星。在地爲五嶽。在人爲五臟。在陰陽爲五行。在王爲五帝。在世爲五德。（卽五常也）在色爲五色。在法爲五戒也。且以不殺戒配東方。此東方主木。木主仁。仁以養生慈愛爲義。若奉持不失。則此戒之五神。擁護一身。肝臟平和。於其生也。以慈育物。仁及含生。木星順度。於其死也。則上生四天。直超上界。復資成淨業。如其犯也。致木星而陵逼。亡身喪命。失好生於現在。種短命於當來。況此殺業果報。結續無窮。故不殺一戒。宜勤持也。不盜戒配西方。以西方主金。金主義。義則循理不貪之謂。如奉持不失。則此戒之五神。護佑一身。肺臟安寧。於其生也。以德推遷。義濟貧乏。金星呈祥。於其死也。上生忉利。竝往化樂。復資成福業。如其犯也。逢金曜而作祟。神氣困窮。喪廉節於人世。招負乘於毛群。況此盜業果報。酬還不盡。故不盜一戒。須堅持也。不姪戒配南方。以南方主火。火主禮。禮則貞潔不亂之謂。如秉受弗違。則此戒之五神。冥佑一身。心臟澄凝。於其生也。進退合宜。禮謹防閑。火星錫福。於其死也。則徑生夜摩。高昇他化。復勤修梵行。倘缺精持。罹火天而降厄親遭幽危。亂倫理於生前。受銅柱於身後。情知姪業果報。求出無期。故知邪姪一戒。宜心持也。不妄語戒配中方。此中方主土。土主信。信則誠實不虛之謂。如遵依罔貳。則此戒之五神。默相一身。脾臟安康。於其生也。

則言可復。信重然諾。土星景佑。於其死也。則上生兜率。高超梵天。復能生功德。一有違犯。感土星而致禍。誣罔證謗。陷欺詐於靈明。膺拔舌於地獄。故知妄言果報。易沈難浮。而妄言一戒。當謹持也。不飲戒配北方。以北方主水。水主智。智則不爲非理之謂。如依循弗違。則此戒之五神。侍衛一身。腎臟滿盈。於其生也。則權寶超群。智照冥徹。水星昭朗。於其死也。則上生化樂。高步蓮宮。復證斷自在。設或沈湎。感水星而從凶。喪失財產。造濁業而愚生。得癡愚於幽道。終嬰非理果報。苦趣無窮。故知因酒非理之戒。不可不堅持也。

⑳ 『止觀輔行伝弘決』卷六之二、唐・湛然（大正四六、三四一頁下二〇～二五行）

如提謂經中長者問佛。何故但五不說四六。佛言。但說五者。是天地之根太乙之初。神氣之始。以治天地制御陰陽成就萬物。衆生之靈。天持之和陰陽。地持之萬物生。人持之五藏安。天地之神萬物之祖。是故但五。

㉑ 『止觀輔行伝弘決』六之二、唐・湛然（大正四六、三四一頁下二五行～三四二頁上二行）

又云。所持五戒者。令成當來五體順世五常五德之法。殺乖仁盜乖義淫乖禮酒乖智妄乖信。憫傷不殺曰仁。清察不盜曰義。防害不淫曰禮。持心禁酒曰智。非法不言曰信。此五不可造次而虧。不可須臾而廢。君子奉之以立身用無暫替。故云五戒。

㉒ 『止觀輔行伝弘決』六之二、唐・湛然（大正四六、三四二頁上二～四行）

又云。不殺過於二儀。不盜如太素。不邪行如虛空。不妄語如四時。

㉓ 『止觀輔行伝弘決』六之二、唐・湛然（大正四六、三四二頁上二～四行）

故提謂經云。不妄語如四時。身遍四根。妄語亦爾。遍於諸根違心說故。火主南方。南方主心。心主舌。舌主夏。酒亂增火。故不飲酒以防於火。

②4 『類聚三代格』卷二「年分度者事」寬平七年太政官符、日本平安・作者不詳（『國史大系』第二五卷、七九頁九、一〇行）

提謂經云。凡說授戒緣三種。所以一者調和四時寒陰故。二者不違日月亢陽故。三者令就年中穀實故。

②5 『法苑珠林』卷三七、唐・道世（大正五三、五八二頁下六、一六行）

又提謂經云。長者提謂白佛言。散華燒香然燈禮拜。是爲供養。旋塔得何等福。佛言。旋塔有五福德。一後世得端正好色。二得聲音好。三得生天上。四得生王侯家。五得泥洹道。何因緣得端正好色。由見佛像歡喜故。何緣得聲音好。由旋塔說經故。何緣得生天上。由當旋塔時意不犯戒故。何緣得生王侯家。由頭面禮佛足故。何緣得泥洹道。由有餘福故。佛言。旋塔有三法。一足舉時當念足舉。二足下時當念足下。三不得左右顧視唾寺中地。

②6 『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』卷下、唐・法崇（大正三九、一〇三七頁中一、五行）

遶佛七匝頂禮佛足者。述曰、第二修敬歸依。文中有二意。一行道、二禮拜。言行道者、卽遶佛七匝也。提謂經曰、行道七匝者、以應七覺分度七世父母也。禮拜者、有其三品。如上所述。

②7 『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』卷下、唐・法崇（大正三九、一〇三七頁中二三行、下一〇行）

爾時護世四天王遶佛三匝者。述曰（中略）言修敬者、卽是遶佛三匝也。提謂經云、三匝者、應三界滅三世罪、除三毒應三業也。

②8 『仏頂尊勝陀羅尼經教跡義記』卷下、唐・法崇（大正三九、一〇四〇頁下二三、一九行）

爾時帝釋至第七日與善住天子。將諸天衆嚴持華鬘塗香末香寶幢幡蓋天衣瓔珞。微妙莊嚴往詣佛所設大供養。以妙天衣及諸瓔珞供養世尊遶百千匝者。述曰。第七持供報恩。文中有二意。一持供、二旋遶。提謂經云、行道有其三品。謂上中下。上者百匝。中者三十匝、下者十匝、以應百年。

②9 『說經才学鈔』卷五上「因緣処」(『真福寺善本叢刊』第三卷、四五一頁下五〜八行)^(iv)

提謂經云、作石塔人得七種功德。一生千萬歲功德空。二得甚長命如臺不滅無限。三得那羅延力。四得千萬歲內國王位。五得遠離生死身如金剛不壞身。六得三明六通六果。七得四十九重願文。

③0 『說經才学鈔』卷五上「因緣処」(『真福寺善本叢刊』第三卷、四五二頁上八〜九行)

提謂經云、提謂長者白佛、旋塔有何功德、有五種福德。一端正好色、二音聲和雅、三生天上王家、五得涅槃道。

③1 『法華玄義』卷一〇、隋・智顛(大正三三、八〇四頁上五〜七行)

又云。欲得不死地、當佩長生之符、服不死之藥、持長樂之印。

③2 『大乘義章』卷一、隋・淨影寺慧遠(大正四四、四六五頁中二〜二行)

提謂經說。諸衆生吾我本淨。吾我本淨。是衆生空。

③3 『大乘義章』卷一、隋・淨影寺慧遠(大正四四、四六五頁中二〜三行)

又說諸法皆歸本無。諸法本無。即是法空。

③4 『金光明經文句』卷一、隋・智顛(大正三九、五〇頁中二五行〜下三行)

提謂經云。五戒者天地之大忌。上對五星下配五嶽中成五藏。犯之者違天觸地。自伐其身也。又對五常。不殺對仁。不盜對義。不淫對禮。不飲酒對智。不妄語對信。又對五經。不殺對尚書。不盜對春秋。不淫對禮。不妄語對詩。不飲酒對易。又對十善。殺盜淫是身三。妄語攝口四。飲酒攝意三。俗不能護口。略制一不妄語。

③5 『淨心戒觀法』卷上、唐・道世(大正四五、八二一頁下二九行〜八二二頁上一行)

如提謂經說。今得人身、難於龜木。

③⑥ 『法華經玄贊要集』卷四、唐・栖霞（卅統歲五三、二五七丁^オ上二一〇一八行）

彼經云。佛告提謂。現在有佛。未來有法僧。當歸佛法僧寶。歸者依憑救濟之義。能歸依。卽清淨三業。信慙愧爲體。所歸是佛法僧寶境。魔外道。一切鬼神。非可歸依。設歸依者。增長邪見。能令衆生輪迴惡趣。恆受苦惱。不如歸依佛僧寶。偈云。諸有歸依佛。終不墮惡道。捨此人中形。受天清淨身。

③⑦ 『仏頂尊陀羅尼經教跡義記』卷上、唐・法崇（大正三九、一〇一三頁下二六行）一〇一四頁上二二行）

又提謂經曰。不論聽法但入寺卽得五種功德。一者端正爲見三寶心生歡喜故。二者好聲爲念佛故。三者生天不餘惡業故。四者尊貴爲禮一切三寶故。五者得證涅槃爲有餘福故。第二不見不聞不得利者有其七種。一者造惡衆生。二者受樂衆生。三者地獄衆生。四者餓鬼衆生。五者畜生衆生。六者病患衆生。七者遠行衆生。第一造惡衆生者貪造十惡五逆。不得聞經云云。第二受樂衆生者如人閒富貴者。衣以羅綺。食以酒肉。若於上界諸天著三鉢衣。五欲樂貪受快樂。不得聞經云云。第三地獄衆生者爲八地獄四增十六隔等皆有刀山。滿目劍樹。侵身猛火。上燒刀輪下切貪受苦。故不得聞經云云。第四餓鬼。第五畜生。第六病患。第七遠行。此之四種以義意釋之云云。

③⑧ 『仏頂尊陀羅尼經教跡義記』卷上、唐・法崇（大正三九、一〇二三頁下二二三行）

提謂經云。由癡虛受信施四事供養故。故受猪身。

③⑨ 『仏頂尊陀羅尼經教跡義記』卷上、唐・法崇（大正三九、一〇二三頁下五〇六行）

提謂經云。惡口慳貪故。故受猪身。爲物慳貪。言野干身者。

④① 『仏頂尊陀羅尼經教跡義記』卷上、唐・法崇（大正三九、一〇二三頁下七〇八行）

又提謂經云。由奸猾語故受野干身。

④② 『仏頂尊陀羅尼經教跡義記』卷上、唐・法崇（大正三九、一〇二三頁下一〇〇一一行）

提謂經云。由遊戲放逸故受彌猴身。

④② 『釈門正統』 卷一、宋・宗鑑（己統歲一三〇、三六〇丁チ上六〜七行）

提謂經受四天王各一石盜。梵王起七寶堂。帝釋建七寶座。勸請說法。

④③ 『法華經句解』 卷一、宋・聞達（己統歲四七、四二二丁チ上六〜七行）

提謂經云初在鹿苑說生滅法五拘隣等得阿羅漢八萬諸天發大道心。

註

(i) 『義楚六帖』 古典叢刊之二（朋友書店、一九七九年）

(ii) 『大日本仏教全書』 第二二冊（仏書刊行会編纂、名著普及会、一九七八年覆刻版第一刷発行）

(iii) 『国史大系』 第二五卷（黒板勝美・国史大系編修会編輯、吉川弘文館、一九六五年）

(iv) 『真福寺善本叢刊』 第三卷（第一期、国文学研究資料館編、臨川書店、一九九九年）

『提謂波利経』本文・引文対照

〔凡例〕

- ・『提謂波利経』巻上・巻下の敦煌本翻刻（上段）と、引文（中段）との対照を試みたものである。
- ・巻上は P. 3732^a、巻下は S. 2051 を底本とする。
- ・巻上：P. 3732
- ・『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』②（上海古籍出版社、二〇〇二年、一七二～一八七頁）所載の影印、並びにインターネットサイト
- ・『International Dunhuang Project』<http://idp.bl.uk/>公開の画像（二〇一六年一月八日アクセス確認）。
- ・巻下：S. 2051
- ・『英国国家図書館蔵敦煌遺書』③（広西師範大学出版社、二五二～二六一頁）所載の影印、並びにインターネットサイト
- ・『International Dunhuang Project』<http://idp.bl.uk/>公開の画像（二〇一六年一月八日アクセス確認）。
- ・行取りは底本の通りとし、行頭に行番号を附した。
- ・上巻の下端には P. 3732 の当該行番号を記した翻刻注を配し、原文に※印を附して注の対象を示した。
- ・P. 3732 には淡墨による訂正（本文と別筆）が散見する。翻刻では訂正後の本文を示し、訂正前の原文及び訂正の状況は翻刻注に示した。
- ・上巻の中段（三三〇～四一四行対応箇所）にはイスタンブール図書館蔵トルファン本の本文を二重線で囲み対照させた。底本は以下の通り。
- ・I. U. No. 30 (verso) 『イスタンブール大学図書館所蔵トルファン出土漢語断片研究』（同志社大学文学部文化史学科西脇研究室、二〇〇七年、九七～九八頁）所載の影印
- ・下巻の下端（一七五行以降対応箇所）には D. x. 1657・BD. 3715 の本文を対照させた。底本は以下の通り。
- ・D. x. 1657 『俄蔵敦煌文献』八冊（上海古籍出版社、一九九二年、二八〇頁）所載の影印
- ・BD. 3715 『国家図書館蔵敦煌遺書』五一冊（北京図書館出版社、二〇〇七年、三八二～三九二頁）所載の影印
- ・対照の便宜のため、P. 3732^a S. 2051 の段落の冒頭と I. U. No. 30 (verso) D. x. 1657^a BD. 3715 の該当箇所を対応させた。
- ・字体は原則として正字体に改めた。
- ・破損等により判読不能な文字は「■」で示した。
- ・不明瞭な文字は残画や文脈により翻字し、□を附した。

(首 欠)

○卷上首部 (P. 3732 前行以前) にあたると推測される引文

言提胃雖說戒善等者彼說。如來在樹王下成道。於七日中、無人知佛得阿耨多羅三藐三菩提。唯提胃波利此二居士。明究陰陽、鑽龜易卜。知佛成道、名爲樹神。提胃獻麩、四天王奉鉢、如來受已。始爲提胃說世間因果。

(引文①) 唐・澄觀『華嚴經疏鈔玄談』卷四)

001 ■■曉睡了■■……………
 002 佛一戒有萬萬……………
 003 治在東方盜戒治在北方淫戒治在西方酒
 004 戒治在南方兩舌戒治在中央在天爲五星
 005 在地爲五嶽在世爲五帝在陰陽爲五
 006 行在人爲五藏長者白佛言何等爲五星
 007 五嶽五帝五行五藏佛言東方爲始星漢言
 008 爲歲星南方爲明星漢言爲熒或西方爲金
 009 星漢言爲太白北方爲輔星漢言辰星中央
 010 爲尊星漢言鎮星是爲五星東方太山漢言
 011 嶽嶽陰陽交代故名代嶽南方霍嶽漢言
 012 霍者獲也萬物熟成可獲故名霍嶽西方老
 013 嶽漢言華嶽華者落萬物衰落故名老嶽北方
 014 長生山漢言恆嶽嶽者山恆者常陰陽久常
 015 萬物畢終故曰恆山中央和山漢言崇山四
 016 方之崇可崇道德故曰名高山是爲五嶽
 017 五帝者帝王也東方太皞漢言青帝亦爲帝
 018 帝南方炎帝漢言赤帝西方涇明帝漢言
 019 少帝北方振翁漢言顛頊中央五帝漢言
 020 黃帝是爲五帝五行者東方木南方火西方
 021 金北方水中央土是爲五行五藏者肝爲木
 022 心爲火肺爲金牌爲土腎爲水是爲五藏長
 023 者白佛言東方陽春萬物盡生殺戒治之云
 024 何四方中央各爾五藏爲之奈何佛言東方
 025 正月二月仙官次治漢言少陽用事陰陽交
 026 精萬物盡生之生之類天壽命各有長短人及
 027 草木各當盡天年天所畜養人取剋絶之
 028 天地之大禁故殺戒治東方欲活衆生故
 029 天之性德殺活生育養衆生以德人物性命
 030 之壽皆含道氣而有形體者畏死樂生凶惡

東方泰山。漢言代嶽。陰陽交代故謂代嶽。
 (引文② 隋 曹長房『歷代三皇紀』卷九)

006 原文「等五」、右傍に淡墨「爲」字有り。
 017 原文「清」字、「青」と訂正(「シ(さんずい)」を淡墨消し)。
 028 原文「方者」、「者」字淡墨塗り消し。

- 031 者害殺之爲逆天地之生氣神祇校其神令
- 032 命促雖有高官重祿富貴自在不能得強
- 033 留氣救神而不死殺者不仁天神所疾何命
- 034 減壽去福就罪災患日生家人多病不盡天
- 035 年厄在春仙官所錄病在肝脾面目青黃
- 036 盜戒所治北方者十月十一月水官次治漢言
- 037 太陰用事萬物春生夏育秋收冬藏盜者得
- 038 物亦藏之天地不和故十一月水冰而高微陽
- 039 在下故盜者不順天心得物藏之故禁盜者外
- 040 防貪濁內以守身七寶金銀琉璃水精車渠
- 041 瑪瑙七寶之氣盜者枉法剋民爲水官所伺
- 042 財產散亡厄在冬病在腎旁光參樵心痛色
- 043 惡
- 044 姪戒所以治西方者七月八月鐵官次治漢
- 045 言少陰用事爲女子則多姪鷄鴨之性當
- 046 路而姪不避母子故禁姪者外防嫉妬色身
- 047 之害內全性命姪嫉无度髓消聰蹇連疾天
- 048 年貪姪致老眼患致病愚癡致死姪者金
- 049 風所害鐵官所司厄在秋肺太腸爲病
- 050 酒戒所以治南方者四月五月火官次治漢言
- 051 大陽用事五月之時天下大熱萬物發狂
- 052 飲酒醉心亦發狂口爲妄語醉或六欲累世
- 053 不醒謂之大醉是以禁酒外防凶變內制貪
- 054 色之戒飲酒者外慢內懦濁弱其聽卅六失
- 055 亂道之口身致危亡不盡天年爲火官所司
- 056 厄在夏病在心脾口舌難語
- 057 兩舌戒所以治中央者參月六月九月十二月
- 058 土官次治漢言中央用事制御四戒稟授四
- 059 氣與土神轉命教應時所任尊重爲四戒
- 060 王惡口傷人由舌所言斬身之禍奔在口中

(Blank area for citation comparison)

- 060 原文判読不能の一字、淡墨「斬」字と重ね書き。
- 052 原文「忘」字、淡墨「妄」と訂正
〔心〕を「女」と重ね書き。

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

【卷十 P. 3732】

【引用文対照】

【翻刻注】

<p>061 氣越神消形枯自欺取死是以禁欺外防<small>※</small>怨 062 禍內以養精淨宅言失則兵至氣損則刑 063 傷危身速命不盡天年爲土官所司厄在四 064 季月病在脾胃口破舌白不知食味 065 長者白佛言兩舌戒爲取重願除廢之佛告 066 長者兩舌戒不可廢所任取重所養甚大四 067 戒之父四行之母<small>※</small>何謂四行戒者殺戒者不 068 行盜戒水行姪戒金行酒戒火行兩舌戒土 069 行在人爲五藏土生木生火生金生 070 水水生土土<small>※</small>四行持之而成木不生火不 071 土不炎水不土不停金不土不成生於土死 072 於土兩舌戒在人爲脾中神主平五味調和<small>※</small>五 073 藏通榮衛氣以養一身脾不<small>レ</small>治者胃氣不 074 行水穀不化則成爲病不可廢也五行者 075 五官也長者白佛言何謂五官所住遠近 076 云何在人<small>※</small>身中官府在何許佛言五官之神分 077 在五處治一處者在欲界中二處者<small>※</small>在人衆生五 078 藏中參處在陰陽中四處在龍鬼神中五處 079 在地獄中五官皆王治諸天人民皆籍屬五 080 官五官亦司善捕惡長者聞佛所說怖曰 081 烏呼痛哉天中天參界盲冥不知天地之大 082 禁不知五官之所司捕天地之間乃有禁忌 083 司捕之負苦哉罪積之人當云何度之佛告 084 長者提謂今佛出世正爲是五道中人作大 085 船師度海流人濟參界之難拔生死之根開 086 甘露門爲大醫王持四種神丹法藥愈參 087 界病何謂四種神丹<small>※</small>一者參白歸 088 二者五戒參者六波羅蜜四者參藏參乘法慧 089 用是四事救度一切行者得安汝莫憂也長 090 者白佛言五藏布氣以養一身其意云何佛</p>		<p>061 原文「防外」、右傍に転倒記号有り。 067 原文「四母行之」、「母」字墨塗り消し、「之」字下 右傍に「母」字を示し「四行之母」と訂正。 070 原文「土四」、右傍に淡墨「土」字有り。 072 原文「調五」、右傍に淡墨「和」字有り。 076 原文「在身」、右傍に淡墨「人」字有り。 077 原文「處在」、右傍に淡墨「者」字有り。 086 ~ 087 八六行「四種神丹」以下、原文「一者三自歸 法藥愈三界病何謂四種神丹」。右傍に「法藥愈三 界病何謂四種神丹」と訂正有り。</p>
---	--	---

<p>091 告長者五戒神在外分爲使者漢言八卦內 092 治五藏生長七體殺戒屬東方使者名震木 093 神於人爲肝腸氣推動萬物支干故謂之肝 094 也酒戒屬南方使者名離火神於人爲心 095 者仁也成養萬物懷任重故謂之心姪戒屬 096 西方使者名兌金神於人爲肺肺者五藏之 097 蓋萬物覆蓋萬物故謂之肺盜戒屬北方使 098 使者名坎水神於人爲腎腎者萬物終成藏 099 去萬物故謂之腎兩舌戒屬中央使者名以 100 土神於人爲脾脾者分氣授與四藏故謂之 101 脾藏者六神之官肝藏魂肺藏魄脾藏意與 102 思腎藏志與智心藏神居中官肝次之心爲 103 王者明上義親仁故故居百重之內出則有 104 前後左右官屬肺爲司馬肝爲司徒脾爲司 105 空腎爲大海中有神龜呼吸元氣流行作風 106 雨通氣四支四支爲民子左右司命右有司祿主 107 錄人命齊中太一君亦人之主柱天大將軍 108 特進兵王主身中萬二千大神太一有八使 109 者漢言八卦神是大倉胃官行厨之官大腸 110 小腸爲^①粟使者主逐捕耶氣參焦關無爲 111 左社右稷主捕奸賊上焦通氣上入頭中爲 112 宗廟丹田主男子藏精女人藏胎中有曲地 113 人身四支與天地等萬物不可犯人亦不 114 可犯傷神明記之是故知^②不可欺地不 115 可負脩身慎行无得懈怠王者欲出司馬在 116 前司徒在後主在中央空留守宗廟社稷 117 是諸神粟氣^③精以養一身外生七體腎主 118 志外生骨髓水中有沙石故生骨髓肝主魂 119 外生筋腸肝爲木肝爲木爲地筋故生筋腸 120 心主神外生血脈心色赤血脈亦赤通神氣</p>	<p>心爲大王上義下仁故。居在百重之內。出則有前後左 右官屬侍衛。肺爲司馬。肝爲司徒。脾爲司空。腎爲 大海中有神龜。呼吸元氣行風致雨通氣四支。四支爲 民子。左爲司命。右爲司錄。主錄人命。齊中太一君 亦人之主柱。天大將軍特進君王。主身內萬二千大神。 太一有八使者八卦是也。合爲九卿。三焦關元爲左社 右稷主茲賊。上焦通氣入頭中爲宗廟。 (引文③ 隋·智顛《觀禪波羅蜜次第法門》卷八)</p>	<p>103 原文「之重」、右傍に転倒記号有り。 114 原文「天下」、「下」字淡墨墨消し。</p>
--	--	---

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

<p>121 其道自然故脾主意外生肥膚脾爲土肥膚亦土</p> <p>122 肺爲五大夫在上不捨不義肝舒仁心在中</p> <p>123 中央稟種種脾在開平五味腎在下漸四氣天生萬物骨以柱之髓以膏之筋以纏之皮以裹之頭負法天足方法地腹溫緩法春夏暘剛<small>■</small>法寒四體法四時鼻口出入氣法山澤</p> <p>124 谷風目法日月開閉法晝夜鹿骨法山陵大節十二法十二月小節參百六十法一歲參百六十日成就一身王道如此餘骨爲齒餘肉爲舌餘筋爲爪餘血爲髮餘皮爲耳是爲五戒神之微妙成身百事長者白佛言五藏諸神出入所由云何佛言肝神由眼腎神由耳肺神由鼻心神由口脾神由舌長者提謂白佛言當何知之佛言肝爲木仁慈心有</p> <p>125 所愍傷眼爲泣出知肝屬眼外明內闇眼</p> <p>126 爲肝候腎爲水內察外闇耳亦內察外闇知腎屬耳耳爲腎候肺五藏之蓋喘息仰之鼻亦通氣喘息知肺屬鼻鼻爲肺候心爲君主惣持諸法口爲心使心念口言知心屬口口爲心候脾爲土土生五穀五穀爲五味舌亦知味故知脾屬舌舌爲脾候是爲五藏神分治六腑以養萬物</p> <p>127 長者白佛言何謂爲六腑六腑爲何<small>■</small>所主佛言膽爲肝腑膽成水爲氣舍肝爲木水生木故爲肝府長者白佛言肝者<small>■</small>仁人怒目張眉楊耶佛言膽者執怒附肝主魂爲人強夫者<small>■</small>必有勇勇者必有怒怒者則目張而眉楊小腸爲心府心赤小腸亦赤心生血氣小腸亦通血氣流入百脈以養神氣不受耶故爲心府</p>	<p>爲大夫在上下捨不義肝。爲尉仁心在中央稟種種脾。在其間平五味。腎在下衝四氣增長。七體成身骨以柱之髓以膏之筋以纏之。脈以通之血以潤之肉以裹之皮以覆之。以是因緣則有頭身手足大分之軀。餘骨爲齒。餘肉爲舌。餘筋爲爪。餘血爲髮。餘皮爲耳。</p> <p>(引文④ 隋智顛『觀禪波羅蜜次第法門』卷八)</p> <p>小腸爲心府。心赤小腸亦赤。心爲血氣。小腸亦通血氣。主潤於心入一身。故大腸爲肺府。肺白大腸亦白。主殺物益肺成化一身。胃爲脾府。胃黃脾亦黃。胃亦</p>	<p>127 原文「剛法」、右傍に淡墨「<small>■</small>」（判読不能）字有り。</p> <p>144 原文「爲所」、右傍に淡墨「何」字有り。</p> <p>146 原文「肝仁」、右傍に淡墨「者」字有り。</p> <p>147 原文判読不能の二字淡墨消し、右傍に「夫者」字有り。</p>
---	--	--

<p>151 大腸爲腑肺白爲金_金。主殺物大腸亦白主殺物成化一身故爲腑_肺。爲脾府胃包黃脾亦黃主意應時動作黃中通理主藏化物通榮衛氣流通四肢皮毛故爲脾府皮光爲腎府腎黑榮氣旁光通深潔潤利小便故爲腎府_腎。合爲一府外。各有所主_上。通津液清溫之氣_中。主通_{血脈}精神之氣_下。通大便之物_參。主通利上下六府之_氣。以成五官之神_{主治}一身。</p> <p>159 長者白佛言舌與口各一耳鼻眼持兩耶那</p> <p>160 長者白佛言舌與口各一耳鼻眼持兩耶那</p> <p>161 言心脾爲君主君主不得兩故舌與口各一肝肺及腎各有兩又爲臣故使眼耳鼻各有兩</p> <p>162 長者白佛言眼押耳魂鼻獨高何佛言肝在中故令眼押腎在下藏深故令耳魂肺在上故令鼻高長者白佛言何謂爲魂佛言魂者外爲青龍漢言太歲內爲肝_神運轉无端動而自安以_養。一身長者白佛言何謂爲神佛言神者內爲心神外爲朱雀_太。一之无虛无之根出入无孔往來无間泥洹君開虛无門</p> <p>167 統御一身立道之根長者白佛言何謂爲魂佛言魂_者內爲肺神外爲白虎寂冥无聲動而自寧執我義割斷禁制非法以附祀義長者白佛何謂爲意佛言意者內爲脾神外爲勾陳與本神轉命教令四方統攝一身屬之不忘</p> <p>174 立行有信故謂之意長者白佛言_{何謂}爲志佛言志者內爲腎神積精專志藏念萬事外爲玄武玄武者神龜居大水之中海亦藏匿寶物玄聖密事於漢言水出六十字以爲經紀負八卦出_闕。王者得之以治天下是五戒神在身治五藏在外治萬物是故五行不可</p>	<p>動作黃間通理脾臟氣大四支。膀胱爲腎府。腎府黑膀胱亦黑。通濕氣潤腎。利小行腸故三焦合爲一府分。各有所主。上焦主通津液清溫之氣。中焦主通血脈精神之氣。下焦主通大便之物。三焦主利上下。五臟之神分治六府。六府之氣以成五官之神。主治一身。</p> <p>(引文⑤ 隋智顛『觀禪波羅蜜次第法門』卷八)</p> <p>出入無亂往來無間。統御一身以立道根。</p> <p>(引文⑥ 隋智顛『維摩經玄疏』卷五)</p>	<p>151 原文「金主」、右傍に淡墨「金」字有り。</p> <p>152 原文「謂」字、「胃」字と訂正。「言(こんべん)」を淡墨墨消し。</p> <p>156 原文判誤不能の「字」上から淡墨墨消し。右傍に「外」と訂正。</p> <p>157 原文「主血」、右傍に淡墨「通」字有り。</p> <p>158 原文「府氣」、右傍に淡墨「之」字有り。</p> <p>166 原文「肺」字、「肝」字と訂正。</p> <p>167 原文「安以」、淡墨塗り消し。右傍に「以養」と訂正。</p> <p>168 原文判読不能の一字、淡墨墨消し、右傍に「雀」と訂正。</p> <p>171 原文「魄者」、「魄」字淡墨墨消し、右傍に「佛言魄」と訂正。</p> <p>175 原文「佛何」、右傍に淡墨「言」字有り。</p> <p>179 原文「秘戒」、淡墨墨消し、右傍に「秘戒」と訂正。</p>
--	---	--

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

<p>181 失失魂者顛失魄者狂失志者忘失意者或 182 失神者死五藏爲五行神氣所治爲五官五 183 官者隴_レ官_レ舍也_レ主藏神 184 長者提謂白佛言神在五藏用事云何佛言 185 五藏之神所住各異肝行仁心行禮肺行義 186 腎行智脾行信此五行者天地之大用天失 187 之妖災起地失之萬物不生四時失之陰陽 188 不和王者失之時天下亂人民失之滅姓名 189 身危亡神氣失之五藏不治發狂死亡是五 190 事天地之大用人之寶也長者白佛言外治 191 五行云何佛言東方爲木木爲震始垂枝布 192 氣於人爲足產氣在肝南方爲火火爲離離 193 明也視火_レ明眼睛也西方爲金金爲兌兌爲 194 口口爲言北方爲水水爲坎內爲_レ清察察爲聽 195 聽者精在耳中央土土爲以_レ苞容萬物隨 196 所種生其類土之信也 197 佛言五戒甚深彌大其神神妙无物不生无 198 所不成无所不入九彌八極細入无間變化 199 无時像无像之像五戒之神起四色之未形 200 故爲天地之始萬物之先衆生之父大道之 201 根五戒是也 202 長者提謂白佛言五戒甚深微妙无所不生 203 无所不成无所不就无所不作无所不爲成 204 就本无如來如來之行如五戒五戒如本无 205 本无如多陀阿竭多陀阿竭如本无天中天 206 世人癡盲久矣天中天譬_レ如父母生子一_レ生 207 之至于十數其子長大了不識父母而反畔 208 倍父母長_レ而不信智者怪而嘆之世人如是天 209 中天令我蒙佛_レ慈悲之恩聞佛說五戒神寶甘 210 露法門已得四淨法曉解本淨一者眼淨一</p>		<p>183 原文「猶官舍也」、淡墨墨消し、右傍に「猶官舍 也」と訂正。 193 原文「必」字、右傍に淡墨「火」字有り。訂正か。 194 原文「内漕」、右傍に淡墨「爲」字有り。 206 原文「天如」、右傍に淡墨「譬」字有り。 209 208 原文「母面」、右傍に淡墨「畏」字有り。 原文「蒙慈」、右傍に淡墨「佛」字有り。</p>
---	--	--

<p>211 者耳淨參者口淨四者身淨受佛大息願以大慈哀乞施五戒爲佛弟子</p> <p>212 佛言善哉善哉佛子四事本淨五陰本淨六</p> <p>213 衰本淨吾我本淨長者曰何等爲四事<small>五陰六衰</small></p> <p>214 吾我者乎佛言四事者身<small>地水火風是也</small>四事合成人身<small>五陰者心<small>本也</small>六衰者六情也色痛養生死識是爲五陰眼視色爲一情耳聽聲爲二情鼻聞臭香爲多情口知味爲四情身更細滑爲五情心常多念爲六情是參本淨如本无本淨如五戒如本无本淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></small></p> <p>220 淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></p> <p>221 淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></p> <p>222 淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></p> <p>223 淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></p> <p>224 淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></p> <p>225 淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></p> <p>226 淨人<small>但坐所起意著外六事色聲香味細滑邪念<small>汗</small></small></p> <p>227 佛言持五戒爲人行十善得生天負責不償借貸不歸<small>愛无道作畜生奴婢慳貪不肯布施則作餓鬼不信有佛不信有法不信有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></small></p> <p>230 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>231 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>232 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>233 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>234 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>235 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>236 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>237 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>238 有比丘僧不信死當後更生爲人不信有天福不信有畜生奴婢餓鬼道<small>不信有地獄不信有今世後世不信作善得福不信作惡得罪誹謗聖道妬賢疾能殺盜姦欺妄言兩舌</small></p> <p>239 長者提謂聞佛廣說人行本即得不起法忍<small>參百人得須陀洹證四天王皆得柔順忍</small></p> <p>240 長者提謂聞佛廣說人行本即得不起法忍<small>參百人得須陀洹證四天王皆得柔順忍</small></p>	<p>提謂經說。五百價人將受五戒。先懺悔彼五逆十惡謗法等罪。得四大本淨。五陰本淨。六塵本淨。吾我本淨。 <small>(引文⑦ 唐 窺基『大乘法苑義林章』卷一)</small></p>	<p>214 原文「爲五」、右傍に淡墨「四事」字有り。</p> <p>215 原文「本也」、「也」字淡墨消し。</p> <p>216 原文「身」字、右傍に淡墨「心」字有り、訂正か。</p> <p>221 原文「淨但」、右傍に淡墨「人」字有り。</p> <p>222 原文「澹墨」、右傍に淡墨「邪念」字有り。</p> <p>231 原文「鬼不」、右傍に淡墨「道」字有り。</p> <p>232 原文「得喜」、「喜」字淡墨消し。</p> <p>240 原文判読不能の一字、淡墨「柔」と重ね書き。</p>
--	---	---

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

【卷十 P. 3732】

【引用文対照】

【翻刻注】

<p>241 參百龍王皆得信根阿須輪衆皆發无上正 242 眞道意山神水神風神火神及夜叉眞陀羅 243 摩休勒等一切諸鬼神有十億衆皆得十善 244 之行長者及諸賈人一切天龍鬼神皆起爲 245 佛作禮皆言受佛大恩求受五戒爲佛弟子 246 佛於是便教長者提謂波利等五百賈人歸 247 命十方過去現在當來諸佛長者請戒一一 248 方面歸命燒好雜香各共遙供養十方諸佛 249 長者及五百賈人受佛重戒各還辦具香華 250 以爲供養佛即教長者等燒香散華遙自歸命 251 東方億百千佛南方西方北方四維上下一 252 稽首歸命佛歸命法歸命十方現在比丘僧來宿命 253 從無數劫以來周旋五道中愚癡不知所作 254 過惡積罪深重今以五體頭地遙自歸命佛 255 歸命法歸命比丘僧歸命諸菩薩衆歸命諸 256 尊天僧衆來今重罪自歸首過改注脩來衆 257 惡爲善諸佛平等普慈衆生願垂神耀聽受 258 某悔過使爲弟子乞施五戒以濟危難佛爲 259 如來不逆一切願蒙聽受懺悔參自叩頭向 260 十方亦如是供養自歸頭身託命周遍十方 261 十方佛各放神光徹照天地外空中散華 262 其墮如雨十方諸佛及釋迦文皆聽爲佛弟 263 子 264 長者及五百賈人天龍鬼神見佛現神皆大 265 歡喜言今蒙大福得值佛興當建精進佛難 266 得值經法難聞皆起作禮拜十方佛及釋迦 267 文長者及五百賈人從佛請戒說佛授參自 268 歸因爲除無數劫中所作罪咎佛告提謂波利 269 五百人等大燒名香散華供養十方佛散髮 270 五體投地各自稱名字某甲歸命佛歸命法</p>	<p>自餘天等發無上道意。十億天人皆行菩薩十善。 （引文⑧）唐 窺基『大乘法苑義林章』卷一</p>	<p>250 原文「華自」、右傍に淡墨「遙」字有り。 252 原文「命法」、右傍に淡墨「佛歸命」字有り。 256 原文「僧」字か、右傍に淡墨「僧」字有り。 259 原文「懺」字、「悔」と淡墨「悔」と重ね書き。 260 原文判読不能の一字、淡墨「邊」と重ね書き。 261 原文「中」字淡墨墨消し、右傍に淡墨「内」字有り。 268 原文「歸爲」、右傍に淡墨「依」字有り。 268 原文「咎」字か、淡墨墨消し。右傍に淡墨「咎」字有り。</p>
---	--	---

<p>271 歸命比丘僧某甲歸命過去佛歸命現在佛 272 歸命當來佛某甲歸命過去七佛歸命七佛 273 弟子歸命過去師歸命現在師歸命當來師 274 某宿命從無數劫以來至于今日在五道中 275 愚癡顛患嫉妬不知佛時不知法時不知比 276 丘僧時不知作惡得罪不知作善得福不知 277 有聖道起惡意向佛破壞塔壞寺佛像盜麥尊 278 物殺真人鬪亂比丘僧叛逆害父母或殺師 279 父或殺郡主或殺兄弟及妻子誹謗聖道斷 280 法斷功德謗說師及父母道國家惡禁止人 281 使不入道身自犯是五逆大罪復教人見人爾 282 助其喜起重罪今自首改往脩來懺悔如是 283 至參復起禮拜十方佛燒香散華至心參悔 284 過言十方現在佛比丘僧受某懺悔於參 285 尊前首過五不請罪諸天龍鬼神皆證知 286 某今日於佛前首五逆罪復還五體投地某 287 甲歸命佛歸命法歸命比丘僧某甲歸命過 288 去七佛弟子歸命過去七佛弟子歸命過去 289 諸師歸命現在諸師願加威神受某懺悔原 290 除無數劫中罪逆某愚癡不知有大福不知有 291 地藏不知有畜生奴婢賊鬼道不知死後更 292 生不知今世後世不知罪福有報輕慢道德 293 誣罔良善詐認取人錢財貪婪愚癡嫉 294 妬呪咀身夢口四意三所犯甘惡逆之罪令皆 295 自首不敢復犯懺悔宿命愚癡或殺祖父母 296 或殺師父母或姪祖母姊妹或姪母姊妹或 297 姪外家慙懺懺悔不敢藏匿今從十方佛求 298 哀除罪懺悔復起供養禮拜訖復還五體投 299 地歸命佛歸命法歸命比丘僧某甲自殺生復 300 教人殺生助其喜身自盜教人盜見人盜助</p>		<p>277 原文「寺壞、右傍に転倒記号有り。」 279 原文「群■〔判誦不能〕淡墨墨消し、右傍に「郡主」字有り。」 281 原文「道自」、右傍に淡墨「身」字有り。 281 原文判誦不能の「字淡墨消し、右傍に「人」字有り。 282 原文「懺」字、淡墨墨消し、右傍に淡墨「悔」字有り。 290 原文「罪某」、右傍に淡墨「逆」字有りか。 294 原文「意所」、右傍に淡墨「二」字有りか。 295 原文「懺」字、淡墨「悔」と重ね書き。 298 原文「懺」字、淡墨「悔」と重ね書き。</p>
--	--	---

【卷十 P. 3732】

【I. U. No. 30 (verso)】

【翻刻注】

301 其喜身自作賊強劫人財輕銓短尺小斗欺
 302 人謂之盜重銓長尺大斗取之謂之劫人
 303 自劫盜復教人見人輕慢諸天善神詐
 304 取人錢財道中拾遺復教人見人爾助其喜
 305 身自忘言兩舌惡口罵詈身自貪情嗜欲
 306 姪奸他人婦女婢使畜生龍鬼神復教人見人爾
 307 助其喜身自忘言兩舌惡口罵詈呪咀證人
 308 入罪見人爾助其喜身自飲酒醉亂亂逆
 309 愚或自欺復教人見人爾助其喜愚癡隨俗
 310 彌流醉於六欲習行顛倒今皆自首過吐瀉
 311 所犯發露不敢藏匿懺參叩投訖復起禮拜
 312 十方佛至心慙愧言不直散華燒香懇懇至
 313 心
 314 復還五體投地某甲歸命佛歸命法歸命比
 315 丘僧歸命諸天僧歸命諸師某從無數劫以
 316 來或作天或作人或作六畜或作鬼神或作
 317 地獄餓鬼中或在天龍阿須輪中或在蟲狩
 318 飛鳥中諸此受身所更之處身行惡口言惡
 319 心念惡六情所犯惡手足所犯惡或行毒殺
 320 人畜狩或行音惡墮入腹中子呪咀天神咀
 321 天日月星辰■*風雨露身形清便水火日月
 322 星辰對井竈社稷呪咀不淨與人毒痛施人
 323 焚燒山澤乾決江海沒溺城社塢落人民衆
 324 生之類破壞成功射鴛羅網捕魚籠繫飛鳥
 325 採樵破卵殘賊衆生斬伐不時身自犯是復
 326 教人見人爾助其喜前世今世所犯罪晝日
 327 所作罪夜所作罪一皆向十方十方佛懺悔自不
 328 藏匿十方佛皆天眼徹視知人心所念是故
 329 不敢藏匿設忘未說者皆在懺中身自懺悔
 330 復爲父母兄弟妻子外家五親朋友知識怨

001 知識怨家賈主讓令一切人民及七世父母皆令解脫憂苦三叩

【I. U. No. 30 (verso)】

321 原文判讀不能の一字、淡墨■（判読不能」と重ね書き。

<p>331 家責主懺悔令一切人民及七世父母兄弟 332 妻子外家皆令解脫憂苦叩頭懺悔*復起禮 333 拜十方佛散華燒香禮謝言受佛大恩受佈 334 大恩苦哉苦哉世尊今乃更生為人願佛布 335 施五戒以治罪根* 336 佛告長者提謂波利等五百人善聽思念內 337 著心中佛戒天地之根萬物之主眾生之母 338 太一之之道之始從五戒業之自致得佛佛 339 戒至重非凡人所能守持也公侯國王王者 340 道德重人乃能持佛戒耳若有人能持五戒 341 令^不犯如毛分者當知是人過去諸佛弟 342 子宿命會更奉持五戒爲佛弟子今續復持 343 五戒是當來佛弟子當爲諸天所擁護現世 344 呂利士進高遷長史歡喜家業諧偶所向如願 345 後尚當作佛何況福德受戒已後當如佛 346 弟子法當改心易行棄惡守善盡畢形壽不 347 不如鎔乍低乍仰持戒當行忠孝不行忠孝者爲 348 不持戒不持戒者罪屬五刑何等爲五刑東 349 方劓爲臠木刑正法五十屬五百南方墨刑 350 爲火正法百屬千西方爲劓刑金亦剋割誅 351 木枝杆割刑亦去人枝杆正法百屬千北方 352 大辟刑水滅火盡其性命辟刑亦殺人滅人 353 性命正法廿屬二百中央宮割刑土塞水 354 不得流盜宮割刑亦禁人情惡不得姪妖正 355 法卅屬參百合參千參千之罪皆屬五刑五 356 刑屬五百五分治五戒 357 佛言人不持五戒者爲无五行殺者爲无仁 358 飲酒爲无禮淫者爲无義盜者爲无知兩舌 359 者爲无信罪屬參千先能行忠孝乃能持五 360 戒不能行忠孝者終不能持五戒不忠不義</p>	<p>002 國讓々復起禮拜十方佛散華燒香禮謝言受佛大恩受師大恩 003 闕々哉々世尊今乃更生爲人願佛布施五戒以治罪根 004 提謂波利等五百人善聽思內著心中佛戒天地之根萬物 005 之主由^由母太一之之道之始從五戒業之自致得佛佛戒之重 006 非凡人所能守持也公侯國王王者道德重人乃能持佛戒耳 007 有人能持五戒今无^不犯如毛分者當知是人過去諸佛弟子 008 宿命會更奉持五戒爲佛弟子今續復持五戒是當來佛弟子 009 爲諸天所擁護現世呂利士進高遷長史歡喜家業諧偶所 010 向如願當當作佛何況福德受戒已後當如佛弟子法當破心 011 棄惡守善盡畢形壽不可如鎔乍低乍仰持戒當行 012 忠孝不行忠孝者爲不^不持^持戒者罪屬五刑何等五刑東方劓 013 爲臠木形正法五十屬五百南方墨刑爲火正法百屬千西方 014 大辟刑亦剋割誅木枝杆割刑亦去人枝杆正法百屬千北方 015 大辟刑水滅火盡其性命亦殺人滅人命正法廿屬二百中央宮割 016 刑土塞水不得流盜宮割刑亦禁人情惡不得姪妖正法卅屬三 017 百合三、千、之罪皆屬五々刑、屬五、官、分治五戒</p>	<p>332 原文「懺」字、淡墨「悔」と重ね書き。 335 原文行末「根」字の二、三字分ほど下、七字程度の擦り消し跡有りか。</p>
--	--	---

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について（新田）

【卷一 P. 3732】

【I. U. No. 30 (verso)】

【翻刻注】

361 不孝不至非佛弟子
 362 佛言參千罪者生屬五刑死屬五官刑在地獄俗人不行五事不持佛戒亦屬五刑持人
 363 地獄五毒兼備不可申說也人無貴賤有佛戒如佛語者生則不憂死則不恐人之罪
 364 福莫大於此五戒持之則為福失之則為罪
 365 罪大無過五逆福大亦無過五戒化義之
 366 刑罔制之防人及恩反恩者則入刑稱之所去
 367 罪之所取禮所杖刑之所錄其根一法戒具
 368 乃成爲道戒行爲信爲清爲貞故號清信士
 369 女曰清信女
 370 長者提謂曰佛言五戒甚大其義甚深禮儀
 371 所成刑罔所禁斷割不義其意云何佛言殺
 372 戒治東方木爲諸侯民之父母仁惠恩施於
 373 民故也酒戒治在南方火爲參公輔王者高
 374 明道德故姪戒治西方金爲大夫主爲王者
 375 誅罪不義盜戒治北方水流行人民爲王者
 376 主使兩舌戒治中央土爲四方王爲天下
 377 主故在中央以是治五行絕五道立五根建
 378 五力滅五罪得五福閉五道開五道入五慧
 379 除五暮得五眼見五法證人道要成法橋得
 380 度脫無愁憂畢苦惱無參毒災不生四痛愈
 381 得長生之符服不死之藥持長樂之印
 382 長者提謂曰佛言五戒實是天地之根萬物
 383 之母天下之天中天佛言不持五戒者如
 384 斷花著日中能看幾時鮮人無戒信如車无
 385 輓不可行如使无傳不可信如種腐望果實
 386 是爲空耗行佛於是說頌曰
 387 若人生百歲 皆冥不見佛 不如生須臾 得觀參界尊

021 ■言三千之罪者生屬五刑死屬五官刑在地獄俗人不行五事不持佛
 022 戒亦屬五刑死入地獄五毒兼備不可申說也人無貴賤有佛戒
 023 如佛語者生則不憂死則不恐人之罪福莫大於此五持之則為福
 024 失之則為罪、大過五福無過五體義成之刑罔制之防人反、恩、
 025 則入刑稱之所去罪之所取禮之所放刑之所錄其根一法戒具乃
 026 成爲道戒行爲信爲清爲貞故號清信士女曰清信女
 027 長者提謂曰佛言五戒甚大其義甚深禮儀所成刑罔所禁斷割不
 028 ■意云何佛言殺讞治東方木爲諸侯民之父母也仁惠施於人
 029 民故也酒讞治南方火爲三輔王者高明道德故也淫讞治西方金爲
 030 大夫主爲王者誅罰不義讞治北方水流行民爲王者是使兩舌讞
 031 誼中土爲四方主、爲天下主故在中央以是治五行絕五道立五根
 032 建五力滅五罪得五福閉五道開五門入五慧除五冥得五明見五法
 033 入道要成法橋得度脫無愁憂畢苦惱無參災不生四痛愈得長生、
 034 ■樂是爲佩長生之符服不死之藥持長生之印

034 長者提謂曰
 035 佛言五戒實是天地之根萬物之母天下之天中天佛言不持戒
 036 者如天地之無根嬰兒无母魚奪于調如樹无根如斷花著日中能看
 037 幾時鮮人無戒信如車无輓不可行如使无傳不可信如種腐
 038 望果實是爲空耗行佛於是說頌曰
 039 若人生百歲 皆冥不見佛 不如生須臾 得觀二界尊

<p>420 若人生百歲 愚癡不奉戒 不如生二時 點慧守持戒 419 若人生百歲 懈怠不精進 不如生二日 敬意行精進 418 若人生百歲 不曉參自歸 不如生二日 得聞參自歸 417 長者提謂及五百賈人聞佛說要法皆大歡 416 喜諸天龍神王亦大歡喜皆稱善哉從佛受 415 參自歸叩頭求戒皆言我等習惡大久今始 414 見佛聞无上甘露之慧從今以去當改心易 413 行如佛教戒行忠孝持五重戒佛言能爾不 412 乎長者皆言審爾天中天主當知之佛眼見 411 諸天龍鬼神知五百人心各各聞經結解皆 410 入道場即受五戒佛復教長者等燒香散花 409 方方禮拜復參自歸命十方諸佛世尊慈哀 408 聽其等受五戒十方諸佛一面有十億萬佛各 407 放眉間白毫相五色光焰熒晃晃百千光明其 406 一光上有一坐佛諸佛皆言聽與五戒釋迦 405 文佛即授長者及諸天龍鬼神戒長者等得 404 觀百千萬佛甚大歡喜重複禮拜燒香散華 403 供養皆言受佛大恩佛告長者等五百人皆 402 斂髮正服叉手長跪佛便即時授長者等五 401 百人戒四大天王諸天宮屬諸龍鬼神五戒 400 十善諸天受大戒人及鬼神受五戒十善之 399 行佛告長者提謂波利等五百人各稱生時 398 名字佛言某甲歸命佛歸命法歸命比丘僧 397 某已參自歸悔過首无數劫中罪過洗心淨 396 意身口供勸自守求受戒爲優婆塞 395 佛言居家脩道名爲優婆塞漢言清信士常 394 行五事歲參齋月六齋純一行五事一者不得 393 殺生禽狩蟲蠶焚燒山澤傷害水姓蚊蠅蠅 392 蝻蠕動之類一不得念惡家惡不得念報殺 391 不得瞋怒殺不得誑人殺不得雇人殺不得</p>	<p>440 若人生百歲 愚癡不奉戒 不如生二時 點慧守持戒 439 (紙縫ぎ部、二行分脱落か) 438 長者提謂及五百賈人聞佛說要法皆大歡 437 喜諸天龍神王亦大歡喜皆稱善哉從佛受三 436 參自歸叩頭求戒皆言我等習惡大久今始見佛得 435 聞无上甘露之慧從今以去當改心易行如佛 434 教行忠孝持五重戒佛言能審爾天中天主當 433 知之佛眼見諸天龍鬼神知五百人心各各聞 432 經入道場即授五戒佛復教長者等燒香散華 431 皆入道場即授五戒佛復教長者等燒香散華 430 拜復三百歸命十方諸佛世尊慈哀聽其等 429 受五戒十方諸佛一面有十億萬佛各放眉 428 間白毫相五色光焰熒晃晃百千光明其 427 一光上有一坐佛諸佛皆言聽與五戒釋迦 426 文佛即授長者及諸天龍鬼神戒長者等得 425 觀百千萬佛甚大歡喜重複禮拜燒香散華 424 供養皆言受佛大恩佛告長者等五百人皆 423 斂髮正服叉手長跪佛便即時授長者等五 422 百人戒四大天王諸天宮屬諸龍鬼神五戒 421 十善諸天受大戒人及鬼神受五戒十善之 420 行佛告長者提謂波利等五百人各稱生時 419 名字佛言某甲歸命佛歸命法歸命比丘僧 418 某已參自歸悔過首无數劫中罪過洗心淨 417 意身口供勸自守求受戒爲優婆塞 416 佛言居家脩道名爲優婆塞漢言清信士常 415 行五事歲參齋月六齋純一行五事一者不得 414 殺生禽狩蟲蠶焚燒山澤傷害水姓蚊蠅蠅 413 蝻蠕動之類一不得念惡家惡不得念報殺 412 不得瞋怒殺不得誑人殺不得雇人殺不得</p>	<p>420 原文「備」字、「請」と訂正(「イ」にんべん)を淡墨「言(ごんべん)」と重ね書き。</p>	<p>440 若人生百歲 愚癡不奉戒 不如生二時 點慧守持戒 439 (紙縫ぎ部、二行分脱落か) 438 長者提謂及五百賈人聞佛說要法皆大歡 437 喜諸天龍神王亦大歡喜皆稱善哉從佛受三 436 參自歸叩頭求戒皆言我等習惡大久今始見佛得 435 聞无上甘露之慧從今以去當改心易行如佛 434 教行忠孝持五重戒佛言能審爾天中天主當 433 知之佛眼見諸天龍鬼神知五百人心各各聞 432 經入道場即授五戒佛復教長者等燒香散華 431 皆入道場即授五戒佛復教長者等燒香散華 430 拜復三百歸命十方諸佛世尊慈哀聽其等 429 受五戒十方諸佛一面有十億萬佛各放眉 428 間白毫相五色光焰熒晃晃百千光明其 427 一光上有一坐佛諸佛皆言聽與五戒釋迦 426 文佛即授長者及諸天龍鬼神戒長者等得 425 觀百千萬佛甚大歡喜重複禮拜燒香散華 424 供養皆言受佛大恩佛告長者等五百人皆 423 斂髮正服叉手長跪佛便即時授長者等五 422 百人戒四大天王諸天宮屬諸龍鬼神五戒 421 十善諸天受大戒人及鬼神受五戒十善之 420 行佛告長者提謂波利等五百人各稱生時 419 名字佛言某甲歸命佛歸命法歸命比丘僧 418 某已參自歸悔過首无數劫中罪過洗心淨 417 意身口供勸自守求受戒爲優婆塞 416 佛言居家脩道名爲優婆塞漢言清信士常 415 行五事歲參齋月六齋純一行五事一者不得 414 殺生禽狩蟲蠶焚燒山澤傷害水姓蚊蠅蠅 413 蝻蠕動之類一不得念惡家惡不得念報殺 412 不得瞋怒殺不得誑人殺不得雇人殺不得</p>
---	--	---	--

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

【卷十 P. 3732】

【引用文対照】

【翻刻注】

421 雇人報惡不得行毒藥殺不得呪咀殺不得
 422 墮入腹中子不得羅網魚鴞飛鷹走狗彈射
 423 禽狩探穢破卵不得食鷄子不得隨分殺受
 424 分不得教誨*人殺不得與殺者同謀不得與
 425 殺者爲友見殺者止之不得思殺不得念殺
 426 常行慈心愍傷一切衆生之類盡刑壽是爲
 427 優婆塞持佛一戒
 428 佛言優婆塞持佛二戒不得盜不得偷不得
 429 貪利他人財物不得迫恐人取錢財不得力
 430 勢恐人取錢財不得因官迫往取錢物不得
 431 誣人取錢財不得枉法受求不得和仇受人
 432 錢物不得道中什遺不得用輕銖小斗短尺
 433 欺人不得長尺大斗重銖受人受與心當平
 434 宜不得詐誣人取錢財升斗尺寸不得欺人
 435 不得持是用欺人一錢以上不得貪利不得
 436 教人作賊不得貪利不得教人欺中不得思
 437 盜不得念盜不得與盜者爲友身自不得犯
 438 戒亦不得教人犯戒若見人犯當止之常當
 439 念有惠施之心當念麥苦一者飢窮苦二者
 440 貧賤苦參者參惡道苦欲滅是麥苦者一歲
 441 麥布施爲除麥毒亦滅麥苦得參福一者生
 442 天上衣食自然二者得家富參者閉參惡道
 443 不得慳惜財貨如是行者是爲我優婆塞盡
 444 形壽持佛二戒
 445 佛言優婆塞持佛參戒盡形壽不得姪姪犯
 446 他人婦女不得形相他人婦女顏色分別好
 447 醜不得聽他人婦女歌音聲不得願作因緣
 448 呼他人婦女共相觀看不得鼓琴音樂歌舞
 449 男女相聚合眉語不得言我善與我同歡可
 450 得其福不得調譏他人婦女若行道中與女

424 原文「儲」字、「請」と訂正（イにんべん）
 を淡墨「言（ごんべん）」と重ね書き。

451 人相見者低頭且行不舉頭視顏色形貌起
 452 意相利與女人相見者當念女人汗露諸不
 453 淨自有婦者自守其婦與婦人合會時不得
 454 念他人婦女善可意不得遍說他人婦女好
 455 惡不得思念他人婦女端政好汝欲形相人
 456 人亦形相汝不得教人姪見人姪當止之懼
 457 莫與姪人為友无止宿他人婦女床臥被枕
 458 中素婦不端不得往來借求若遠行不得獨
 459 宿寮婦人舍若他人男子不在亦不得止宿
 460 常當念貞潔之行姪嫉者不淨為種生死根
 461 機此敗高節之行身自不得犯亦不得教人
 462 是為我優婆塞持佛參戒盡形壽
 463 佛言優婆塞持佛四戒盡形壽不得兩舌不
 464 得妄*人人罪法中見言者言不見者言不
 465 見心亦當至誠語不得中傷人意欲語妄心
 466 闕語徐徐語時不得瞋怒不得譏人不
 467 得傳舌相鬪不得媚辭自與不得私魂說人
 468 長短不得忘證人事不得先人語不得諍語
 469 求勝不得輕易口言不得相調故不得惡口
 470 綺語兩舌罵詈呪咀不得欺中君主師父母
 471 知識不得道說國家師父母妻子之惡不得
 472 說道沙門隱士不得受目下婦女小兒僕使
 473 虛言論韶媚*辭有所狂不得思妄*言不得念
 474 妄*語不得教人見人犯口過當止之不得與
 475 妄*語人為友不得稱譽妄*言人不得賣舌當
 476 念至誠欲語當念佛念戒念師守持心口无
 477 犯禁戒口為禰門言出患入所以滅身由其
 478 惡言堅持莫失是為我優婆塞持佛四戒盡
 479 形壽
 480 佛言優婆塞持佛五戒盡形壽不得飲酒

(This section is intentionally left blank for reference purposes.)

464 原文「忘」字、「妄」と訂正（「心」を淡墨「女」と重ね書き）。

473 原文「囧」字、「姪」と訂正（左傍に淡墨「女」を書き入）。

474 原文「忘」字、「妄」と訂正（「心」を淡墨「女」と重ね書き）。

475 原文「忘」字、「妄」と訂正（「心」を淡墨「女」と重ね書き）。

476 原文「忘」字、「妄」と訂正（「心」を淡墨「女」と重ね書き）。

477 原文「忘」字、「妄」と訂正（「心」を淡墨「女」と重ね書き）。

478 原文「忘」字、「妄」と訂正（「心」を淡墨「女」と重ね書き）。

479 原文「忘」字、「妄」と訂正（「心」を淡墨「女」と重ね書き）。

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について（新田）

【卷十 P. 3732】

【引用文対照】

【翻刻注】

<p>481 不得嘗酒不得思酒不得持酒作味不得 482 以酒施人不得教人飲酒不得入酒舍不得 483 與嗜酒人爲友不得與酒客相故不得過從 484 鬼神家飲食不得食鬼神殘不得教人祭鬼 485 神不得拜天求福不得棄酒飯與鬼不得破 486 鬼神舍不得輕易天龍鬼神不得過婆羅門 487 飲食不得輕易婆羅門勸制有餘行不足不 488 足者仁義禮智信有餘者貪欲也當念黠慧 489 无醉亂无失禮无失義无失仁无失慈无悖 490 逆酒爲狂水衆失之原注成諸惡酒有卅六 491 失大失者失忘忘者失仁仁者失義失義 492 者失禮失禮者失信失信者爲失五戒失五 493 戒者則非佛弟子飲酒鬪亂致^四禍皆從酒 494 起見嗜酒者急當離之堅持五戒盡形壽若 495 得土官亦當持五戒入軍亦當持五戒欲出 496 家學亦當持五戒若作沙門亦當持五戒作 497 具足沙門亦當持五戒欲求沙門四道亦當 498 持五戒求菩薩道亦當持五戒戒具道根衆 499 行之主爲衆德本不可失不可離是諸佛母 500 諸佛持五戒積德本自致得佛道有犯五戒 501 者非佛弟子</p> <p>502 佛言優婆塞已受五戒度世道者當持七日 503 齋思惟念罪考躬責己參時禮拜十方諸佛 504 燒香燃燈散華至誠叩頭伏地通辭首過懺 505 悔一陳辭參叩頭參自陳九叩頭晝夜各參 506 時當讀經行道捨棄一切百種作事死死无 507 犯七日齋新受戒者一天遣廿五神來下監 508 察覆視知爲至誠偷詔耶上至十六凡有百 509 五十天神護之司命校定罪福錄籍上天天 510 曹移閻羅拔籍除死定生除魔鬼神名籍署</p>		
--	--	--

【卷十 P. 3732】

【引用文対照】

【翻刻注】

- 511 爲清信士清信女名人黃歷〔守戒爲善名
- 512 繫天曹爲惡者名入四〔室七日夜半諸神
- 513 龐君左右契皆還上天具奏帝釋精進如師
- 514 教者釋與鎮臣卅二人參議即勅司命增年
- 515 益壽差天善神一戒令五神救助持五戒完
- 516 者令廿五神營護門戶所向諸偶七日齋竟
- 517 當報恩作福施呪願令諸天神得福力歡喜
- 518 并祠鬼神母已後當持九九齋者應九神所
- 519 止處除九憶滅九思愈九病故持九齋何等
- 520 爲九齋歲參齋月六齋是爲九齋歲參齋者
- 521 滅參界想制參流斷苦習入盡道治參毒
- 522 出參界求參道出參塗應參專用是故持歲
- 523 參齋救參世〔四六齋者制六情
- 524 六〔中有 〔以下六類

【卷一 S. 2051】

【引用文対照】

【IX. 1657 \ BD. 3715】

（首欠）

○『提謂波利經』卷上末尾（P. 3732524行以後）或いは卷下首部の20610行以前にあたるを推測される佚文

年三長齋。提謂經云。正月本齋十五日。正月本齋十五日。九月本齋十五日。三齋因緣。如經廣說。

（引文⑨）新羅 大賢『梵網經古跡記』卷下末

（又白佛言。何故月有六日宜齋。佛曰。八日遣使者下。十四日太子下。十五日四王下。二十三日使者復下。二十九日太子復下。三十日四王復下。皆在世間。錄其善惡。錄籍六卷。五處錄籍定罪福。是以立六日。須齋助善止惡。）

（引文⑩）宋・義楚『義楚六帖』卷六・齋會「三長齋」

又提謂經云。年二長月六齋二明日月燈火下及八王日。亦名八節日。竝須禁之（八王日如下述）若受不妄語戒者。

（引文⑪）唐 道世『法苑珠林』卷八八

又提謂經云。提謂長者白佛言。世尊。歲三齋皆有所因。何以正用正月五月九月。六日齋用月八日十四日十五日二十三日二十九日三十日。佛言。正月者。少陽用事。萬神代位。陰陽交精。萬物萌生。道氣養之。故使太子正月一日持齋。寂然行道。以助和氣長養萬物。故使竟十五日。五月者。太陽用事。萬物代位。草木萌類。生畢百物。懷妊未成。成者未壽。皆依道氣。少陰用事。乾坤改位。萬物畢終。衰落無生。衆生蠶蟻。神氣歸本。因道自寧。故持九月一日齋。竟十五日。春者萬物生。夏者萬物長。秋者萬物收。冬者萬物藏。依道生沒。天地有大禁。故使弟子樂善者避禁持齋。救神故爾。長者提謂白佛言。三長齋何以正用一日至十五日。復言。如何名禁。佛言。四時交代陰陽易位。歲終三覆八枝一月六齋。三界暗暗五處錄籍。衆生行異五官典領。校定罪福行之高下。品格萬遠。諸天帝釋太子使者。日月鬼神地獄閻羅百萬神衆等。俱（願行目に就く）

001 用正月一日五月一日九月一日四布案行
 002 帝王臣民八夷飛鳥走狩鬼神龍行之善惡
 003 知與四天王月八日十五日盡平生所奏同
 004 不平均天下使无枉錯覆校三界衆生罪福
 005 多少所屬福多者即生天即勅下四鎮五羅
 006 大王司命等增壽益算下閻羅王攝五官除
 007 罪名定福祿諸四鎮三公九卿五大夫司徒
 008 司空司馬大將軍四王等奉天統命即遣
 009 竺使銅虎符八王使者風伯雨師下地獄攝
 010 五官除死定除罪益福遣諸善神案護之
 011 罪多者減壽奪算移名下閻羅王十五日乃
 012 竟用是故欲避大尊天神天之監司故使持
 013 是三長齋是爲三覆
 014 八校者八王日是也亦是天帝輔鎮五羅四
 015 王地獄王阿須倫諸天案行比較定生死增
 016 減罪福多少有道意无道意大意小意開解
 017 不開解出家不出家案比口數皆用八王日
 018 何等爲八王日八王日者立春春分立立夏
 019 至立秋秋分立立冬至是爲八王日天地諸
 020 神陰陽交代故名八王日月八月十四日十
 021 五日廿三日廿九日卅日皆是天地用事之
 022 日上下玄望朔晦皆是錄命上計之日故使
 023 於此日自守持齋以道自救使不犯禁自致
 024 生善處諸此之日皆稱南无佛南者歸无者
 025 身佛者覺故言南无佛南者側无者善佛者
 026 智故言南无佛南者禮无者持佛者爲受教
 027 故言南无佛南者歸无者身佛者明故言南
 028 无佛南无者爲驚怖佛者爲覺意三觀三佛
 029 爲尊佛急卒三稱南无佛即得安穩
 030 佛言欲求後世富貴者讀是經欲求後世長

(前頁より続き) 用正月一日五月一日九月一日。四布案行帝王臣民八夷飛鳥走獸鬼神龍行之善惡。知與四天王月八日十五日盡三十日所奏同。平均天下使無枉錯。覆校三界衆生罪福多少所屬。福多即生天。上即勅四鎮五羅大王司命。增壽益算。下閻羅王攝五官除罪名。定福祿故。使持是三長齋。是故三覆八校者八王日是也。亦是天帝釋輔鎮五羅四王地獄王阿須倫諸天。案行比較定生注死。增減罪福多少。有道意。無道意。大意小意。不開解不開解。出家不出家。案比口數。皆用八王日何等爲八王日。謂立春春分立立夏夏至。立秋秋分立立冬至。是爲八王日。天地諸神陰陽交代。故名八王日。月八日十四日十五日二十三日二十九日三十日。皆是天地用事之日。上下玄望朔晦皆錄命上計之日。故使於此日自守持齋。以還自校使不犯禁。自致生善處。

(引文⑫) 唐 道世『法苑珠林』卷八八

提謂經云。南者歸、無者命、佛者覺(此云歸命覺也)。又南者禮、無者大、佛者壽(此云禮大壽也)。(引文⑬) 唐 道宣『四分比丘尼鈔』卷中之下

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について(新田)

【卷一 S. 2051】

【引用文対照】

【IX. 1657 \ BD. 3715】

<p>031 壽者讀是經欲求生天上者讀是經欲求尊 032 貴者讀是經欲求佛道者讀是經欲求羅漢 033 道者讀是經欲求點慧者讀是經欲求端政 034 好者讀是經欲得閉三惡道者讀是經欲得 035 无怨惡者讀是經不欲作鬼神龍者讀是經 036 欲却生老病死者讀是經欲得泥洹道者讀 037 是經奉行如法所願悉可得天神祐之 038 長者提謂聞佛所說天地神祇懸察驚喜白 039 佛言幸賴得值佛興聞其法敢得遠三界苦 040 願發无上正真道意諸天龍鬼神及賣人一 041 皆歡喜言蒙佛大恩乃知大禁長者提謂等 042 乞聽作七日施佛默然聽許梵天知佛意告 043 提謂曰佛默然以爲相許惟宜用時長者提 044 謂及五百賣人歡喜作百味饌具甘肥脆美 045 奉上世尊并及諸天龍鬼神天龍鬼神皆化 046 身作沙門光衛世尊七日七日施訖長者提 047 謂白佛言五戒爲度无極爲度无邊除生死 048 之難爲度恐畏我國人皆樂爲善佛未到之 049 頃若有善男子善女人聞佛五戒歡喜信樂 050 行者爲可轉授與人不愿告其意 051 佛言戒者如船戒師如船師自相能善諸船 052 曉解水意望風舉帆候知水道能不迷者乃 053 可作船師不能者莫自強健并沒溺死海水 054 中了无有救亦无救者若能自守持佛五戒 055 不犯如毛分者能了解說中行如中事者 056 乃可授與他人戒授戒之法先當曉爲弟子 057 懺除三品之罪閻浮利地皆是他方清淨佛 058 國輕■泥墜此中人宿命皆在地方犯戒之 059 人罪不違墮地獄福不違生天摘來生是是 060 故師當爲弟子除宿命罪至于今日生長以</p>	<p>又彼經云。五戒爲諸佛之母。欲求佛道讀是經、欲求 阿羅漢讀是經。 （引文¹⁴ 隋智顛『妙法蓮華經文義』卷一〇）</p>	
--	--	--

<p>061 來愚癡所作罪過先授三品懺悔法然後乃 062 授五戒如法與之勿令少短誤脫誤脫顛倒 063 上著下著上授戒文不了了又不曉分別 064 十二惡道及十二因緣五道中事不曉護行 065 未達五戒義不了根門不解鵝鴨蟲蟻蚤盲 066 蠅蝻何行致之是皆平生為人時違戒行耶 067 但坐師不明授戒文不了了或其人性強不 068 用師教師不相人趣求名譽用供養故不思 069 惟五道厄難之時身不能自救安能救人妄 070 授人戒俱墮厄難猶如兩病人終不能相救 071 授人戒爲重任大難 072 正使沙門持戒持戒不入法律行違法律猶 073 不當爲他人師何況戒不了了爲不曉持戒 074 不知所行爲不曉求度世道猶如盲人不見 075 道復云何欲示人道智所不信不持戒者不 076 曉行之所趣不當妄信弟子亦不當趣受佛 077 戒自大言在我所行耳不在師也是爲兩癡 078 俱不得度兩人惡道如人私矯稱爲吏私相 079 署置官爵不行沙門慢戒不承至法趣授人 080 戒如人私相署置王者覺之俱兩得罪慢法 081 弟子更相授戒亦復如何況優婆塞若國 082 中无沙門男女樂爲善樂戒優婆塞戒俱了 083 了曉解行事有慧慮有權宜曉度人如其是 084 足者自可授與人戒但可教化十方佛比丘 085 僧自可受俗禮老者不宜受禮不得受和南 086 禮當數教令持戒護意守行令脫十惡地得 087 生三善處若後有持律行沙門當牽手授與 088 道人使更受戒後則无優俱兩得度是爲助 089 佛化愚亦人之師導善本本立而道生是故 090 知五戒師爲重</p>		
---	--	--

【卷ノ S. 2051】

【引用対照】

【IX. 1657 \ BD. 3715】

<p>091 佛言持五戒大難勤守護心意令不犯道禁 092 可前却如稱乍低乍仰持五戒猶如持五 093 利劍失一劍五劍盡投地傷破人身失一戒 094 爲失五戒傷人神入三惡道无復出期戒師 爲生行從三惡道中拔度弟子授人五戒爲 095 已開三惡道爲生從亂劍下救脫弟子爲生 096 從大火中大護中手牽弟子出之五戒十善 097 師爲重爲以度人若後弟子出家不得宿命 098 本師終不得度雖得餘師終不成就受戒而 099 已行不入律非佛弟子師與弟子俱不相信 100 終不得度 101 佛告提謂我現身般泥洹滅度後世名五亂 102 一者王道亂二者人民亂三者寄進亂四 103 者九十六種道與佛道奄弊五者正法亂其 104 時沙門不非法戒遊行入出放心无禁設有 105 奉戒沙門自守者衆共非之妄合无端詐誣 106 清白衣人沙門私行犯戒外揚清白此爲論 107 諂白衣人外學之士因其信之衆言能沈 108 木浮石壞人心或人意帝王人民中有點者 109 乃識眞人癡者信之衆言異口同音誦詭守 110 戒清淨之人令守戒者心不得令魔因得其 111 便助動作之遂共鬪諍更相陷墮欲令陷墮 112 惡道令清白意疑不信佛道誹謗沙門因是 113 皆墮地獄受形无竟是爲五亂令法毀滅諸 114 天不悅人民不得大福弟子皆當入淵受形 115 无數劫上智者教守戒自許云我行菩薩道 116 長者提謂白佛言甚難甚難天中天持五戒 117 爲度一切爲閉絕三惡道佛言爲閉絕十惡 118 道一者地獄道二者畜生道三者餓鬼道四 119 者鬼神道五者奴婢道六者毒獸道七者飛 120</p>		
--	--	--

<p>121 鳥道八者蚊盲蠅蛾蟲蟻道九者蝻蠅道十 122 者猪狗道復有二種苦一者龍中苦二者阿 123 須倫中苦是爲十二惡道用之則度不用之 124 墮惡道隨行受報持五戒完者得三善道一 125 者生天上二者生人中三者生十方佛前犯 126 戒者有十二耶行愚癡致之布施顯惠墮龍 127 中行五度具足心悔愁毒墮阿須倫中喜論 128 詔墮鬼神中喜姪逸犯他人婦女爲飛鳥姪 129 親族爲鷄鴨喜劫人剝脫他人衣服墮蟲中 130 匿慧不語人爲土木中蟲好帶弓刀騎乘後 131 爲夷人夷人好獨殺後爲豺狼人好舩突負 132 責不償後爲六畜喜著釵華後爲犄角蟲喜 133 著長衣後爲長尾蟲喜著木跋後作有甲蟲人 134 喜盜竊惡口後作狗人喜樂牀坐臥食供養 135 无用心後作猪人喜貪咽後生爲蠅人喜 136 樂綵服後生爲斑鳥人喜赤口後爲赤嘴鳥 137 人喜野盜藏去所有後生爲鼠人喜野田作 138 藏後爲野鼠人喜盜人物後爲野獸人喜負 139 責不償後爲牛馬人喜水中藏物後爲鯨魚 140 人喜含毒惡口喜以水沛人則爲水中毒惡 141 蟲人喜持不淨糞穢之物施人及奴婢後作 142 溺中蟲惡性喜效伎樂後爲獼猴教人布施 143 不可意則怒後爲師子人喜脫人衣冠持頭 144 舩突人及罵訾沙門形[圖]禿人後便白禿喜 145 臥熱沙上復教人則爲蝸蟻亦墮龍中人喜 146 匿深室惡口譏人无犯者橫自譏人不自 147 引負復惡口刺人後爲蝸蟻惡蠅又有三事 148 一者從本无中來二者魔中來作憍憍人三 149 者人喜相低醜後爲憍憍蟲罪竟爲蠅人喜 150 相[圖]捏後爲土蠅人喜故放上下風後爲蚍</p>		
--	--	--

敦煌本『提謂波利經』諸本の關係について(新田)

【卷ノ S. 2051】

【引用文対照】

【IX. 1657 \ BD. 3715】

<p>151 蝶蟲人喜通惡聲後爲鷄泉鳥人喜禰語後 152 爲後狐負責不償借貸不歸後爲奴婢人故 153 強乞後爲終身客人喜睡臥後爲蝶蟲蠅 154 蟲凡此卅事并地獄餓鬼合爲五十二事爲 155 微妙惡行五戒中事曉解五道中有形之類 156 曉解行事了乃可中爲人師乃可授人戒 157 佛言千歲欲末時我弟子自共破我法不肯 158 誦學不隱密道性粗略行之不入法律終 159 不得勉三塗之難身自不持戒不行威儀設 160 見智者說戒威儀入律之行皆言今日世人 161 何時能知如是行耶求道長遠不可爾也使 162 共更相訪效放心散意犯戒慢法已爲作罪 163 復作法中大魔憎上奉法自守戒者當衆雷 164 同四輩更相謗訕不自知行違流入三牢迷 165 行致之復於罪中作罪何以故自犯戒復憎 166 守戒清白者是爲罪中之罪惡中之惡者我 167 般泥洹後弟子雜外學不能專一心不^閉正 168 經行不究戒因共往抄妙聖典藏本略現 169 經抄令後學者不知經頭尾不知句義令人 170 不度亦不得道但用不了故後人不見經本 171 依抄授人戒戒文不了了不知佛口所出終 172 不得脫是十二惡道師與弟子自謂得度不 173 知行違死後俱墮惡道終不得度或師不明 174 或弟子不奉師戒是故人三惡道 175 佛言譬如兩病人終不能相扶持師與弟子 176 不行戒威儀者如兩病人終不能相擔救亦 177 不能相度脫長者提謂曰佛言甚深微妙與 178 人五戒爲甚難天中天爲人重任大難天中 179 天輒如教奉行不敢違失一事五百買人 180 聞經歡喜一一內著心中皆白佛言一切衆</p>		<p>【IX. 1657】 001 002 佛言譬如兩病人終不能相扶持師與弟子 003 行戒威儀者如兩病人終不能相 004 能相度脫長者提謂曰佛言甚深微妙與 005 戒爲甚難天中天爲人重任大難天中 006 教奉行不敢違失一事 007 聞經歡喜一一內著心中皆白佛言</p>
---	--	--

<p>181 生欲作行求保人道如佛言者甚難甚難天 182 中天人心一念去一念來一適滅一復生心 183 之狡猾造作无端百心百念以成百身人意難 184 護心爲身本心不可見不可信是故知人 185 身難得度世甚危甚難天中天佛言如汝所 186 言佛語无有異人身實難得譬如二人一 187 人在須彌山上織樓下之一人在山下持針仰 188 迎縷使入針鼻中相去三百卅六萬里復有 189 隨風猛風吹之寧能使縷值針鼻孔中不長 190 者提謂五百人等皆言不可相值天中天十 191 劫百千億萬劫終不能使縷值針鼻中天中 192 天佛言億億萬劫不可計劫會復值針鼻孔 193 中如是易耳求人身難得於此百千萬億倍 194 不可計倍不可爲喻人身實難得身死欲使 195 還服人身甚大難譬如凡器互取好細赤土 196 以爲器燒成可用久久破以棄之欲令還合 197 爲本土可得合不日不可合佛言棄是破器 198 著无人之處曰夜風吹久久數千億萬劫會 199 還與本土合人死欲還服本人身難於此百 200 千萬倍不可爲喻行戒者少不持戒者多受 201 而不行而不具故致百畜身皆由其心意 202 難制御故人少百畜多貴人少賤人多好人 203 少醜人多用行戒德者少故也</p> <p>204 佛言五道之報皆由心生念佛則有佛報 205 心念人則有人報想畜犢作畜獸想飛鳥作 206 飛鳥念惡得惡報念善得善報種病得病報 207 種痛得痛報不種不得種長命得長命種短 208 命得短命種好得好種醜得醜種富得富種 209 貧得貧種苦得苦種樂得樂種福得福種罪 210 得罪作五道行則生五道不作五道行則无</p>	<p>又提謂經云。如有一人在須彌山上以織樓下之。一人 在下持針迎之。中有旋風猛風。吹縷難入針孔。 (引文⑮) 唐 道世『法苑珠林』卷三三)</p>	<p>008 求保人道如佛言者甚難天中天人〔一〕 009 念法一念來一適滅一復生心之狡猾造作 010 无端百心百念以身人箇難護身爲心本心不 011 不可信是故知人身難得度世甚危 012 ……因中天佛言如所言佛語不異… 013 ……得譬如二人在須彌山上織樓下之一人 001 在〔二〕下持絲針迎縷使入針鼻中相去三百〔BD. 3715〕 002 三十六萬里復有風風吹之寧能使縷入針 003 鼻中不長者等五百人皆言不相值天中因 004 十劫百劫千劫萬萬劫終不能使縷入針鼻 005 天中天佛言億億萬劫不可計劫會復值 006 孔中如是易耳求人身難於此百千萬億倍 007 不可計倍不可爲喻人身實難得身死欲使 008 還服人身甚大難譬如凡器互取好細 009 赤土以爲器燒成可用久久破已棄之欲令 010 還合爲本土可得合不日不可合佛言棄破器 011 置无人處曰炎風吹久久數千萬劫會還本 012 土合人死欲還服本人身難於此百千萬 013 不可爲喻行戒者少不持戒者多受而不行而 014 不具故致百畜身皆由其心意難制御故人 015 少百畜多貴人少賤人多好人多乃 016 用行戒德行者少故也</p> <p>017 佛言五道之報皆由心生念佛則有佛報 018 人則有人報想畜犢作畜獸想飛鳥作飛鳥 019 念惡得惡報念善得善報種病得病種痛得 020 痛不種不得種長命得長命種短命得短命 021 種好得好種醜得醜種富得富種貧得貧 022 種苦得苦種樂得樂種福得福種罪得罪 023 行生五道不作五道則无五道作是則是得是</p>
--	---	--

【卷ノ S. 2051】

【引用文対照】

【BD. 3715】

<p>211 五道報作是得是報不作是則无是報罪福 212 自追如影隨形罪福錄人毛分不差然人以 213 知罪福有報猶如人種五穀種麥得麥種麻 214 得麻如人負責要當償不得不得償端見死者 215 故殺不止端見六畜奴婢來償責不知止故 216 復貪盜不知足端知有頑闇瘡癩癡人故飲 217 酒不止當知是人心迷意閉三毒自隨不得 218 離三惡道苦 219 佛言人在五道墮大生死厄難之地劇逆天 220 逆賊劇甚於牢獄是故人當求明師善友孝 221 事三尊信敬善師隨喜善師教當以佛意教 222 弟子令曉遠罪了理句義教使行戒威儀令 223 入法律入律行者十萬佛乃受作弟子持戒 224 不不完不行戒威儀者是人行不入律不入律 225 者十方佛不受爲非佛弟子不勉三苦毒不 226 離十二惡道是爲世間小善人耳若人得奉 227 道明師守戒清淨无欲道士承事供養者譬 228 如有不肖之人犯大罪者知某長者與王親 229 厚王大敬之若有所啓王皆用語語有罪之人 230 點慧知長者言行語用使歸命命長者從其求 231 哀長者慈心教罪人言土俗財貨飲食爲之 232 重惠當具禮費吾當爲汝白王請汝命罪人 233 即具所當長者即行啓王王即聽之入得奉 234 事明師持戒律道士亦如罪人事長長者雖 235 復有罪所因者強但當隨師教弟子作除殃 236 福除殃滅罪弟子不憂三塗之苦不慮无常墮 237 貪但云无所有不肖奉師教死後入地獄悔 238 毒不可言生時不承用師教不益作善我本 239 愚癡愛惜財物遺與妻子恨不益作福我之所 240 有妻子錢財田宅珍寶盡留世間不能追隨</p>		<p>024 報不作是則无是罪福自追如影隨形罪福 025 錄人毛分不差然人以如罪福有報猶如種五 026 穀種麥得麥種麻得麻如人負責要當償不 027 得止端見死者故殺不止端見六畜奴婢 028 來償責不知止故復貪盜不知足端知有頑闇 029 癩癡人故飲酒不止知是人心迷意閉三毒 030 自隨未得離三惡道 031 佛言人在五道大生死 032 之地厄難厄處地逢大逆賊處甚於牢獄是 033 故人當求明師善友孝事三尊信敬善師 034 隨師教令師當以佛意教弟子令曉遠罪 035 了理句義教使行戒威儀令人入法律入律行 036 者十萬佛乃受作弟子持戒不不完不行威儀 037 是不入律不入律者十萬佛不受爲非佛弟 038 子不勉三苦處不離十二惡道是爲世間小 039 善人耳若人得值奉明師守戒清淨无欲道 040 士承事供養者譬如不肖人犯大罪知其長 041 者與王親厚王大敬之若有所啓王皆用語語 042 有罪之人點慧知長者言行語用使歸命長 043 者求哀長者慈心教罪人言土俗財貨飲食 044 之屬重惠當具犯費吾當爲汝白王請命罪 045 人即具所當長者即行啓王王即聽之得奉 046 事明師持戒律道士亦如罪人事長長者雖 047 有罪所因者強但當隨師教弟子作除殃 048 滅罪弟子不憂三塗之苦不慮无常墮但 049 云无所有不肖奉師教死後入地獄悔毒不 050 可言生時不承用師教不益作善我愚癡愛 051 惜財物遺與妻子恨不益作福我之所有妻 子錢財田宅珍寶盡留世間不能追隨我我</p>
---	--	---

241 我我令獨於是受罪愁毒都无知者亦无有
 242 來救我者師往語之鄉平生時而不相信不
 243 用吾教當如今日誰有益鄉者其人言我實
 244 不值吾但念父母妻子兄弟宗親奴婢財寶
 245 盡在世間不能救我我生時視於師如他人
 246 如今日師親於父母妻子百億千倍萬倍唯
 247 有三人隨我來師曰何等爲三人其人言一
 248 者福二者罪三者師是三者與我相隨父母妻子
 249 兄弟財寶盡留世間不能追救我我悔不奉
 250 師教師是我黑劫親父母眞師當救我如是
 251 悔无所耳
 252 佛以抓取地少土語長者曰地土多耶我所
 253 取抓上土多也長者曰佛言地土甚多奈何
 254 比抓上土佛言後世間人作我弟子者如閻
 255 浮利地土持戒得度者如我抓上土皆入三
 256 惡道中是故未來世時人少有能忍謙苦守
 257 戒者耳設有能守戒行威儀者此非凡人人
 258 所不識及共非之
 259 佛言人持一戒兒具者有五福五戒完具者
 260 有廿五福失一戒有五惡五善神去之犯五
 261 戒得廿五惡廿五善神去之諸天善神愁憂
 262 不樂司命減壽諸惡鬼神守門戶因裏病
 263 之更相注續更臥更起遂行下問解奏鬼神
 264 鬼神遂深入死亡不絕世俗凡人不解法者
 265 謂呼事佛已反更衰喪不知其人作行自違
 266 不親明師不用禁戒著意自致禍殃反更怒
 267 佛佛三界至尊欲令一切得福得度不欲令
 268 得罪長者曰佛言何等爲五福五惡願加大
 269 恩解脫令得奉行之
 270 佛言人於世間慈心不殺生從不殺生得五

052 今獨於此受罪愁毒都无知者无有來救我
 053 者師往語之鄉平生時不相信不用師教當
 054 如今日誰有益鄉者其人言我實不宣父母
 055 妻子兄弟宗親奴婢財寶盡在世間我生時
 056 侍於師如他人如今日師親於父母妻子百
 057 倍千倍萬倍唯有三人隨我來師曰何等三
 058 人其人曰一者福二者罪三者師是三者與
 059 我相隨父母兄弟妻子財寶盡留世間不能
 060 追救我我悔不奉師教師是我黑劫親父母
 061 眞師當救我如是悔无所益
 062 佛以介取地少土語長者言地土多我介上
 063 土多取長者曰佛言地土多奈比介上土也
 064 佛言後世人不作我弟子者如閻浮利地
 065 土也持戒者得度者如我介上土皆入惡道
 066 是故末世時人少有能忍謙苦者守戒者耳
 067 設有能守戒行威儀者此非凡人所不識及
 068 共非之
 069 佛言人持一戒完者有五福五戒完者有廿
 070 五福失一戒有五惡五善福去之犯五戒得
 071 廿五惡廿五善神去之諸天愁憂不樂司命
 072 減壽諸鬼神屯守門戶因裏病之更相注續
 073 更臥更起遂行下問解除奉鬼神鬼神遂深
 074 入死亡不絕世俗凡人不解法者謂事佛已
 075 反更衰喪不知其人作行自違不親明師不
 076 用禁戒著意自致禍殃反更怒佛佛三界尊
 077 欲令一切得福得度不欲令得罪長者曰佛
 078 言何等爲五福五惡願加解說令得奉行
 079 佛言人於世間慈心不殺衆生從不殺得五

【卷一 S. 2051】

【引用文対照】

【BD. 3715】

271	福何等爲五福一者得長壽二者世世得安	080	福何等爲五福一者身得長壽二者世世安
272	隱三者世世不爲兵刃虎狼毒蟲之所傷害	081	隱三者世世不爲兵刃虎狼毒蟲之所傷害四
273	四者死得上天上壽無極福五者從天上	082	者死得上天上壽無極五者從天上來下
274	來下生世間即得長壽今現有百歲无病者	083	生世間即長壽今現有百歲无病者皆故世
275	皆故世宿命不殺所致樂死不若苦生如是	084	宿命不殺所致樂死不若苦生如是分明愼
276	分明愼莫犯殺也	085	莫犯殺也
277	佛言人於世間不盜取他人財物道不捨遺	086	佛言人於世間不盜取他財物道不捨遺心
278	心不貪利從是得五福何等爲五福一者財	087	不貪利從是得五福何等爲五一者財物上
279	者口惜二者不亡遺三者无所畏四者得生	088	增二者不亡遺三者无所畏四者得生天上
280	天上多珍寶五者從天上來下生世間常	089	多珍寶五者從天上來下生世間常保守其
281	保守其財物縣官盜賊不得侵取今現有保	090	財物縣官盜賊不得侵取今現有保守財物
282	守財物至老者皆是故世宿命不盜取他人	091	至老者皆是故世宿命不盜他人財物所致
283	亡无多少令人憂惚少亡遺不如	092	亡无多少令人憂惚亡遺不知保在如是分
284	保在如是分明愼莫盜取他人財物也	093	明愼勿盜取他人財物
285	佛言人於世間不犯他人婦女心不念姪從	094	佛言人於世間不犯他人婦女心不念姪從
286	是得五福何等爲五福一者不亡錢財二者	095	是得五福何等爲五一者不忘錢財二者不
287	不畏縣官三者不畏人四者得上天天上	096	畏縣官三者不畏人四者得生天上玉女
288	玉女作婦五者從天上來下生世間得端政	097	作婦五者從天上來下生世間得端政令尊者
289	好婦今世現有若于婦皆端政好皆由故	098	順有若于婦皆端政好皆故世宿命不犯他人
290	世宿命不犯他人婦女所致現在分明	099	婦女所致現在分明愼莫犯他人婦女
291	愼莫犯他人婦女也		
292	佛言人於世間不兩舌讒人惡口不妄言	100	佛言人於世間不兩舌讒人惡口忘言綺語
293	不綺語從是得五福何等爲五一者語言見	101	從是得五福何等爲五一者語言見信二者爲
294	信二者爲人所愛敬三者口氣香好四者死	102	人所愛敬三者口氣香好四者死得上天爲
295	得生天爲諸天所敬五者從天上來下生世	103	諸天所敬五者從天上來下生世間爲人好
296	間爲人好口齒他人不敢持惡口汗之今現	104	口齒他人不敢持惡口汗之今現有從生至
297	有從生至老不破口語者皆是故世宿命護	105	老不被口語者從故世護口善言所致如
298	口善言所致如是分明亦可順口	106	是分明亦可愼口也
299	佛言人於世間不飲酒醉從不醉得五福何	107	佛言人於世間不飲酒從不飲得五福何
300	等爲五一者傳言上事進見長史語言不誤	108	等爲五福一者傳言上事進見長史言語不

<p>301 士官如意二者家事脩理常有餘財三者賈 302 借求利疾得常爲人所愛敬四者死得上天 303 爲諸天所尊敬五者從天下來下生世間爲人 304 淨潔自喜點慧曉事人不飲酒得若干善 305 今現有曉事人自喜皆從故世宿命不飲酒 306 所致如是分明亦可慎酒 307 佛言人於世間喜殺生无惡心從是得五惡 308 何等爲五一者壽命短二者多驚怖三者多 309 怨仇死者死後魂魄當入太山地獄中毒痛 310 考治燒灸脯煮斫刺肌肉屠剥破骨求死不 311 得求生不得殺生罪大久乃出五者從地 312 獄中來出生爲人常當短命又從胎傷而死 313 或墮地而死或數十日死或數百日死或一 314 年死或數年死今現有短命人若形殘癱創 315 身體不具或跛或癱或盲或聾或瘻或毒鼻 316 塞癰或无手足孔竅不通利皆由故世宿命 317 屠殺射鴛羅網捕魚殘殺所致如是分明順 318 莫犯殺 319 佛言人於世間喜偷盜劫人強取他人財物 320 不以道理詐欺取人財物輕稱小升短尺欺 321 人謂之盜長尺大升重稱侵人謂之劫道中 322 拾遺取非其物負責不償借貸不歸持頭佯 323 觸人詐誣人因官勢力恐怯人從是得五惡 324 何等爲五一者財物日耗減二者王法所疾 325 覺得當償辜多得少脫三者身未曾安穩常 326 懷恐怖亦爲自欺身四者死後魂神當入太 327 山地獄中考治无数歲隨所作受罪五者從 328 太山地獄中來出生隨其所負輕重償其宿責 329 或有作奴婢償者或作牛馬驢駝駝鳥大 330 猪羊鷄鴿償者諸下賤禽獸飛鳥魚鱉之屬</p>		<p>109 誤士官如意二者家事修理常有餘財三者 110 假借求利疾得常爲人所愛敬四者得上 111 天爲諸尊所重五者從天下來下生世間爲人 112 淨潔自喜點慧曉事人不飲酒得若干善 113 今現有曉事自喜人皆從故世宿命不飲酒所 114 致如是分明亦可慎之也 115 佛言人於世間殺生无惡心從得五惡何等 116 爲五一者壽命短二者多驚怖三者多仇惡 117 四者死魂魄當入太山地獄中毒痛考治燒 118 灸脯煮斫刺肌肉求死不得求生不得殺生 119 罪大久乃出五者從地獄生來出生爲人 120 當短命或傷胎而死或墮地死或數十日死 121 或百日死或一年數歲死今現有短命人若 122 刑殘癱創身體不具或免缺或盲聾音痾 123 刺鼻塞癰或无手足孔窮不通皆故世宿命 124 屠殺射鴛羅網捕魚賊殺所致如是分明慎 125 莫犯殺 126 佛言人於世間喜偷盜劫人強取人財物不 127 以道理誣取人財物輕鈴小斗短尺欺人謂 128 之盜長尺大斗重鈴侵人謂之劫道中什遺 129 取其物負責不償借貸不歸持頭低觸人詐 130 誣人物因官勢力恐劫人從是得五惡何等 131 爲五一者財物日耗減二者王法所疾覺得當 132 保辜多得少脫三者身未曾安穩多懷恐怖 133 亦爲自欺身四者死後魂神當入太山地獄 134 中考治无数歲隨所作受罪五者從太山地獄 135 中來出隨其負輕重償其宿責或有作奴婢償 136 或作牛馬驢駝駝鳥大猪羊鷄鴿償者諸 137 下賤禽獸飛鳥魚鱉之屬皆是負責者故經</p>
---	--	---

敦煌本『提謂波利經』諸本の關係について（新田）

【卷一 S. 2051】

【引用文対照】

【BD. 3715】

331	皆是負責者故經言責不腐朽此之謂今世	138	言責不腐朽此之謂也今現有下賤畜生之
332	現有下賤畜生之屬否從故世宿命貪利強	139	屬皆從故世宿命強取他人財物所到畜生
333	取他人財物所致畜生勤苦如是現在分明	140	勤苦如是分明憶莫取他財物也
334	順莫取他人財物		
335	佛言人於世間喜姪挾犯他人婦女從是得	141	佛言人於世間喜姪挾犯他人婦女從是得
336	五惡何等爲五一者家室不和夫婦數鬪諍	142	五惡何等爲五一者家室不和夫婦數諍亡
337	亡失財物二者常畏縣官撻治鞭杖從事王	143	失財物二者縣官得鞭杖從是王法所疾身
338	法所疾身自當辜撻治鞭撻多得少脫三者	144	自當辜多死少生三者亦自欺身當恐畏人
339	亦自欺身當恐畏人四者死後魂神當入太	145	四者死後魂魄當入太山地獄獄鬼燒鐵柱
340	山地獄獄中鬼神燒鐵柱正赤身當抱之但	146	正赤身自抱之坐抱他人婦女故致是極殊
341	坐犯他人婦女故致是極殊如是數千萬萬	147	如是數千萬劫受刑乃竟五者從太山地獄中
342	歲受形乃竟五者從太山獄中出生當爲鷄	148	出生當爲鷄鴛鳥獸人神无形所著爲各今
343	鷄獸人神无形所著爲各今現有鷄鴛當路	149	現有鷄鴛當路而姪挾不比母子亦无節禮
344	而姪不避母子亦无節度畜生之屬皆有獸	150	畜生之屬皆有信足鷄鴛姪挾无信足皆
345	足鷄鴛姪挾獨无厭足皆從故世宿命犯他	151	由故世宿命犯他人婦女故致是鷄鴛鴝鴨
346	人婦女故致是鷄鴛鴝鴨之身當爲人所食	152	之身當爲人所食噉如是勤苦不可申說現
347	噉如是勤苦不可申說現在分明憶莫犯他	153	在分明莫犯他人婦女也
348	人婦女		
349	佛言人於世間喜兩舌讒人惡口妄言自貢	154	佛言人於世間兩舌惡口忘言自貢高綺語
350	高綺語誹謗聖道疾賢妬能啤吡高士從是	155	誹謗聖道嫉賢妬能啤吡言從是得五惡何
351	得五惡何等爲五一者多惡增二者爲自欺	156	等爲五一者多惡增二者爲自欺從是人皆
352	不信三者數逢非禍四者後當入太山地獄	157	不信三者數逢非禍四者後當入太山地獄
353	當入太山地獄獄鬼從項中拔出其舌若燒	158	獄鬼從項中拔出其舌若燒鐵鉤鉤其苦求
354	鐵鉤鉤斷其舌求死不得求生不得久久數	159	死不得求生不得久久數千萬歲形乃竟五
355	千萬歲受形乃竟五者從地獄中來出生爲	160	者從地獄中來出生爲人常惡口齒免缺譽
356	人常當惡口齒免缺譽吃重語增瘖不能	161	吃重語或音癩不能言今現有是曹人皆從
357	言今現有是曹人輩皆從故世宿命兩舌讒	162	故世宿命兩舌讒人誹謗聖道所致如是分
358	人誹謗聖道所致如是分明亦可慎口	163	明亦可慎口
359	佛言人於世間喜飲酒醉從是犯卅六失何	164	佛言人於世間喜飲酒醉犯卅六失何等
360	等卅六失一者人飲酒醉便子不敬父母臣	165	卅六失一者飲酒醉便子不敬父母臣不敬

361	不敬君君臣父子无有上下二者醉便言語	361	君君臣父子无有上下二者醉便言語當
362	常多亂誤三者醉便兩舌多口語四者醉人	362	亂誤三者醉便兩舌多語四者人有音私伏
363	有陰私伏匿之事醉便道之五者醉便笑天	363	匿之事醉便道之五者醉便哭天溺社不避
364	忘諱六者醉便臥道中不能復歸或亡失所持	364	忘諱六者便臥道中不能復歸或亡失所持
365	財物七者醉便哭起不能自端政八者醉便	365	財物七者醉便哭起不能自端政八者醉便
366	低仰其頭橫行或墮溝坑九者醉便頃覆起破傷面	366	低仰頭橫行或墮溝坑九者醉便頃起復起
367	日十者醉便賣買當當亂誤十一者醉便失事不憂治生	367	日十者醉便賣買當當亂誤十一者醉便多失事不憂治生
368	十二者醉便所有財物日日消散耗減十三者醉便不憂	368	念妻子飢寒十四者醉便惡罵不避王法十五者醉便妄入人舍
369	念妻子飢寒十四者醉便惡罵不避王法十五者醉便妄入人舍	369	人舍中罪人婦女語言干悞其過无狀十六者醉便解衣脫褲
370	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	370	人過其傍欲共鬪十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
371	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	371	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
372	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	372	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
373	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	373	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
374	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	374	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
375	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	375	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
376	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	376	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
377	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	377	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
378	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	378	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
379	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	379	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
380	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	380	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
381	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	381	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
382	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	382	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
383	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	383	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
384	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	384	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
385	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	385	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
386	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	386	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
387	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	387	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
388	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	388	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
389	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	389	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺
390	過无狀十六者醉便解衣脫褲褌形而走十七者醉便入過其傍欲與其鬪	390	十八者醉踰地囉呼驚怖四隣十九者醉便忘殺

【卷一 S. 2051】

【引用文対照】

【BD. 3715】

391		196	識知今現有患癡无所識知人皆從故世
392		197	中宿命飲酒喜醉所致如是分明亦可慎酒
393		198	酒有卅六失飲酒醉者皆犯卅六失佛說經
394		199	已諸天梵釋諸天龍鬼神四輩弟子聞佛所
395		200	說皆大歡喜作禮而去
396			
397			
398			
399			
400			
401		201	五戒威儀
402		202	佛言賢者優婆塞已受五戒即當行七事何
403		203	等七事一者當持戒令堅二者持月六齋三
404		204	者當持歲三齋四者當從師受齋法五者當
405		205	數到寺中膝六者當誦經七者當行道復
406		206	有五事一者當念佛二者當念經法三者當
407		207	念比丘僧四者當念師息五者莫違師教吹
408		208	行五事一者莫形相沙門二者莫求長短三
409		209	者若見誤失莫向他人說道四者莫盜罵沙
410		210	門五者沙門說戒經時不得注聽之
411		211	入佛圖寺中有十一事一者當嚴正衣服二
412		212	者入門時莫左右顧視三者莫中心與人語
413		213	真前禮佛四者若見是非忘呵之五者不
414		214	得直著禪袴作禮六者不得持刀倚塔七者
415		215	不得逆塔行八者出入當隨順九者不得帶
416		216	刀繞塔十者不得持刀作禮十一者一切當
417		217	行恭敬不應作禮十二事一者沙門投漿時
418		218	二者沙門飯食時三者沙門座禪時四者沙
419		219	門睡眠時五者沙門至舍後行還時六者沙
420		220	門滲唾時七者不得於坐作禮八者不得於
421		221	床上作禮九者不得逆作禮十者不從師後
422		222	作禮也

佛說提謂經卷下

		<p>223 齋日入衆人中有廿二事一者當禮佛二者 224 當禮比丘僧三者當小滿聲四者當隨次坐 225 五者不得更相濡讓六者當遺上坐一人處 226 七者不得與女人併坐八者不得在女人下 227 坐九者不得語咲十者不得著甲沙十一者不 228 得著木跋十二者不唾淨地十三者不得伏 229 坐上十四者若讀經誤不得大咲十五者若 230 賜經當徐徐下錢物莫使有聲十六物不得 231 著指粉香動衣十七者不得帶持刀杖十八者 232 莫當沙門戶住十九者莫睡臥廿者一心聽 233 經廿一者當念經戒廿二者當隨次起出 234 坐有七事一者莫伸兩足二者莫垂兩足三 235 者莫交兩足四者莫手據地五者莫倚壁六 236 者莫持手住頰七者莫數起 237 布香有十四事一者當次住二者莫先老人 238 與年少三者莫與女人相雜錯四者莫與女 239 人相排湯五者莫調謔女人六者女人設先 240 布香且使過七者當下竟八者莫與世間人 241 香九者以入比丘住十者當隨次持香十一者當 242 於塔四角住十二者莫令香煙還自動十三 243 者見前有住人當呼與香十四者莫得再持 244 香 245 入講堂有八事一者莫當門止作禮二者 246 莫併入門三者當隨次作禮四者當隨行住 247 坐五者莫同偈六者莫亂語七者莫亂起八 248 者當還行出 249 繞塔有八事一者當念佛二者當念經戒法 250 三者當念比丘僧四者當低頭視地蟲莫踏 251 殺五者莫唾塔上六者莫中止與人語七者 252 若見地有草當拾去莫用足排之八者若見</p>
--	--	---

		<p>253 有不淨繞塔竟已當糞捨之</p> <p>254 見佛像有七事一者頭面着地作禮二者見像上有萎當去之三者若像上有塵當拂</p> <p>255 試去之四者莫忘訶像好醜五者設拂拭像</p> <p>256 莫持手摩面六者莫榮拏指七者當持淨手巾拭之</p> <p>257 入沙門戶有六事一者當三彈指二者如法禮三者莫當戶坐四者莫睡淨地五者莫說</p> <p>258 世間不急事六者當還向戶出</p> <p>259 宿佛圖寺中有五事一者莫臥沙門牀上二者莫取沙門被枕三者莫調譏四者莫先臥五者當早起</p> <p>260 至廁左右有五事一者當三彈指二者莫促中人使疾起三者以至廁上復彈指四者莫自視陰五者當深手</p> <p>261 朝起澡手有五事一者莫偃二者莫背向塔像若師沙門亦莫背向澡手三者莫中止與人語四者莫止爲人作禮五者莫於淨地澡</p> <p>262 入浴室有五事一者當低頭直入二者莫在沙門上浴三者莫先沙門浴四者莫調譏五者莫破壞家器物設有所破壞當備償之</p> <p>263 入溫室有五事一者當作比丘僧二者莫忘訶大三者莫睡淨地四者莫亂語五者設起出當還向戶牽閉之</p> <p>264 見沙彌有五事一者當禮如大沙門法二者莫戲埽之三者莫以小兒意待之四者設能說</p> <p>265 經當聽受五者莫呼名使</p> <p>266 於寺中作飯有七事一者當自助市買二者當顧地牀席三者當雇薪火四者當雇釜竈</p> <p>267 栴槃五者若有所破壞當備償之六莫訶</p>
--	--	---

		<p>283 罵人客七者飯人當令遍自助深鑿 284 侍沙門飯有七事一者當持兩手撻器邊授 285 之二者莫令手著沙門手三者行視上下若 286 短少急先益之四者莫偏有所增益五者若 287 羹飯莫於上語咲六者益羹令汁澤均調七 288 者當具掃帚深豆深水 289 請沙門飯有七事一者當令淨潔二者莫先 290 自食三者莫持女人衣被布坐四者莫於兵 291 蘭下坐五者莫先食問經六者莫念窮人經 292 七者莫訶罵人客一切當恭敬 293 持深瓶鍾水有五事一者當右手持下二者 294 當近左面三者當正下水手中四者水滿手 295 中止後者相視水少當益之莫令任人手持 296 水 297 持深鑿有五事一者莫令深鑿有聲二者 298 莫令近人衣三者莫棄水淨地四者深未訖 299 莫引去五者已當自深手 300 持手巾有五事左手持頭右手授人二者莫 301 擲人口三者莫倚人膝四者拭手未已莫引 302 去五者已當還著故處 303 掃地有五事一者當從上始二者莫背日師 304 上人三者莫汗人足四者當糞棄之草莫去 305 土五者已當自深手 306 入市買物有六事一者人未買肉莫先買二 307 者斷後餘肉莫盡買三者莫言今日何以无肉 308 四者莫擇生魚求死魚五者莫買鷄子六者 309 莫止人婦人邊調謔 310 受人請飯有十二事一者當隨衆教令二者 311 坐起老小當相比三者當止意受四者莫 312 語人有所益五者莫先上人食六者莫先止</p>
--	--	---

- 313 熟視人七者莫澆汗人席八者莫強相咬九
 314 者莫食味十者莫念今日飯快勝某日十一
 315 者若見有不可莫令人知十二者去當讀經
 316 念道
 317 耆老共會平曲直有五事一者莫有所佐
 318 助二者老下坐有所語莫以力勢訶止之
 319 三者莫自用四者莫畏疆長者五者莫侮末
 320 孤寮
 321 行道路有五事一者若逢沙門禮如法二
 322 者莫隨後呼之三者與語即對不語即退四者
 323 語未竟莫背去五者若有急當至誠告乃退
 324 到優婆夷家有五事應入一者用病瘦死亡
 325 故二者用縣官盜賊水火故三者用福會故
 326 四者爲師使故五者若讀經故无伴輩不應
 327 夜往
 328 不應優婆塞家有四事一者居无老年兼
 329 人二者素聞不端良三者飲酒戲會四者
 330 莫莫夜往故遇風雨不應入
 331 居家有十六事一者朝起深唵當禮佛像二
 332 者若无像者當禮十方佛三者莫持像近妻
 333 子牀臥四者燒香莫令有貧若貧實无當供
 334 齋日五者莫慢經法六者莫持刀兵者像邊
 335 七者莫持器物著像承塵上八者莫於前坐世
 336 間人飲酒九者莫背像坐十者莫當像前
 337 臥十一者設在像前伏當自鄣頭首佛十二
 338 者莫單著禪袴拜佛像十三者莫鄣火光
 339 十四者莫取佛像前火去十五者設取非當
 340 三迴照佛像十六者莫吹火滅
 341 暮臥有六事一者當思惟行道二者當誦經
 342 三者當言南无佛四者莫念人惡五者當念

343 非常六者當念樂少憂多是菩薩所行
 344 教優婆夷入佛寺有十事一者不得在男子
 345 上坐二者莫形咲人三者莫著脂粉畫眉四
 346 者莫擊香著珠環五者莫與男子相咲六者
 347 當隨男子後七者莫相排湯八者布香莫以手
 348 觸人手中九者當隨次持香十者當隨人教
 349 令一心繞塔悔過自責堅持五戒轉身受福
 350 可得男子亦可得佛
 351 賢者優婆塞奉持此二百五十事有五福一
 352 者長離三惡道二者疾見諦三者欲作沙門
 353 易得師四者天龍鬼神常擁護之五者世世
 354 在三寶中若不能奉行之轉相丈持者有五
 355 罪一者隨三惡道二者難見諦三者欲作沙
 356 門難得師四者鬼神繞侵之五者世世不遇
 357 三寶處
 358
 359 佛説提謂五戒經并威儀卷下

the same manuscript (Scrolls One and Two). S.2051, on the other hand, is a manuscript which serves the purpose of filling in the lacunae of [Jx.1657 + BD.3715].

In addition, the citations from the *Tiwei Poli jing* in various Buddhist scriptures offer an important source for reconstructing the lost portions the original Dunhuang manuscripts. I have therefore listed all quotations currently identified and also appended a concordance to the *Tiwei Poli jing* text (Dunhuang Mss and Turfan Ms I.U. No. 30 (v)) and these citations.

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

敦煌本『提謂波利經』諸本の関係について（新田）

Summary

Stemmatic Relations Between the Dunhuang Manuscripts of the *Tiwei Poli jing*, with a List of Citations and Concordance to the *Tiwei Poli jing* Text and Citations

Yu Shinden

The *Tiwei Poli jing* 提謂波利經 is an apocryphal scripture composed in China by Tanjin 曇靖 during the reign of Emperor Xiaowu 孝武帝 (453-464) of the Liu Song 劉宋 Dynasty. For a long time, the text was believed to have been lost, but the research conducted by Makita Tairyō between 1964 and 1973 led to the identification of four Dunhuang manuscript fragments: Scroll One (P. 3732) and Scroll Two (S.2051; Dx.1657; BD.3715). Makita's conclusions, however, were based on partial access to the manuscript photocopies as well as the survey of the scriptural catalogues, which explains why he did not discuss the stemmatic relations between the fragments.

Needless to say, a detailed study of the *Tiwei Poli jing* requires the clarification of the relations between all extant fragments. The current availability of facsimile editions as well as online access to the manuscripts makes such a study possible. Nonetheless, all contributions published since Makita's seminal work remain content to repeat his conclusions.

My paper attempts to address this desideratum by investigating the textual witnesses themselves from all available sources, whether printed or digital. The conclusions yielded by this research shows that Dx.1657 and BD.3715 were originally part of the same manuscript as well as the fact that [Dx.1657 + BD.3715] and P.3732 come from the hand of the same copyist. This makes me assume that P. 3732 and [Dx.1657 + BD.3715] go back to